英雄譚《しゅやくたち》を歌う歌姫《まがいもの》～異聞・英雄《しゅやく》になれない槍使い～

笹木さくまのファン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

西暦二〇三一年、謎の結晶体「ＣＥ」の襲撃により、人類は緩やかに滅亡への坂を転がり落ちていた。

これは、聖剣の輝きによって地球を救った、偉大な英雄の物語――ではない。

英雄の陰に埋もれ、歴史の闇を駆け抜けた、一人の槍使いの物語……でもなく。

そんな彼らと関わり、歪んだ英雄譚を崩壊へと向かわせた一人の紛い物の歌姫の物語である。

なろうで笹木さくまさんに許可をもらい、書かせてもらいました！

満足できるかどうかわかりませんが……頑張ります！

原作は此方です→ｈｔｔｐｓ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ９６８２ｄｄ／

目次

第一章～歌姫の誕生～
プロローグ ―― 1
第１話　邂逅 ―― 5
第２話　遭遇 ―― 9
第３話　正体不明 ―― 13
第４話　目標 ―― 19
第５話　覚醒 ―― 23
【英傑達の英雄譚・第一章『英傑の邂逅』２６ページより】
30
第二章・依怙贔屓？それでも少女は前を向く
第６話　幻想兵器と暗躍する者 ―― 34
第７話　学生寮と日課 ―― 39
第８話　教室格差 ―― 45
第９話　汝らはＤ組 ―― 50
第１０話　いざ行け授業 ―― 58
第１１話　昼食と先輩 ―― 65
第１２話　暗器と制御不能 ―― 71
第１３話　風呂と血塗れ ―― 78
【英傑達の英雄譚・第二章『最初の授業』４３ページより】
84
第三章～突然の遭遇、歌が響く時～
第１４話　現状の戦線 ―― 87

第一章～歌姫の誕生～

プロローグ

普段はのどかな町の中が、今や悲鳴と怒号で埋め尽くされていた。
「走れ！　とにかく走るんだ！」
「荷物なんて捨てろ、もたもたするな！」
「頼む、俺も車に乗せてくれ！」
老若男女の区別なく、誰もが押し合い必死に逃げる。
立ち止まってしまえば、背後から迫るモノに追いつかれてしまう。
そうなれば、待っているのは死しかない。
「ＳＡＴ及び機動隊、現着！」
『急げ！　『奴等』はすぐ近くだ！』
「しかし……許可も取らずに出撃して良かったんですか？」
『市民の命に比べれば上からの出撃許可なんぞ糞食らえだ！』
「違いないですね！」
駆け付けた警察車両から現れた機動隊とＳＡＴの隊員がそんなことを言いながら機動隊は無秩序に逃げる市民達の逃走を妨げないようにしつつ流れを整え、ＳＡＴは機動隊が持ってきた盾を地面に壁のように置き、銃を構える。
『来たぞ！』
ＳＡＴの隊員達はその言葉を聞いて周囲を見渡し……隊員の一人に赤い光線が突き刺さった。
「が……!?」
「赤羽……!?　くっそおぉぉぉぉぉ！　水晶の化け物がぁ！」
「撃て、撃ちまくれ！」
ＳＡＴは糸の切れた人形のごとく倒れこんだ隊員を心配する暇もなく現れた『それ』に向かって銃を撃ち込む。
撃ち込まれているのはポツンと浮かぶ透明の六角柱結晶。
大人の身長ほどもある巨大な結晶の中心では、赤い球体がうっすらと光を放っている。

出来の悪い合成写真のような、非現実的な物体。
だが、それは間違いなくＳＡＴ隊員の精神を殺した存在であり、世界に滅びをもたらす人類の敵。
「ダメです、有効打を確認出来ません！」
「泣き言を言うな！　我々が少しでも奴の攻撃を……あが!?」
ＳＡＴの一斉射撃をまるで受け付けていない物体に泣き言を言う隊員を叱った隊員が物体から放たれた赤い光を受けてもんどりをうって倒れた。
「く、くそ……！　くそおぉぉぉぉ……げふ!?」
「足止めもでき……ぎゃあ!?」
「怯むな！　体当たりをしてでも……がばふ!?」
「援軍が来るまで……あぎゃあ!?」
物体に市民を攻撃させまいと必死に応戦しているＳＡＴ隊員を嘲笑うかの様に無傷の物体は雑草でも刈るかの様に光線でＳＡＴを駆逐していく。
「逃げ遅れた市民が！」
「なんだと!?」
その様子に焦りながら避難を誘導していた機動隊の隊員がそれに気付く。
それは必死に逃げる市民に押されて倒れた少女であった。
「あ、あぁ……」
「く……！　うおぉぉぉぉぉ！」
「止せ、池谷！」
怯えて逃げられない少女に若い機動隊員が走りより、少女を抱えるが……物体は無情にもその隊員に向けて光を放とうとする。
（神様……どうか、どうか俺が死んでも、この子は……この子と市民達、それから機動隊やＳＡＴのみんなは助けてください……！）
青年は己の死を確信しながらも、受験の時にしかしたことのない神頼みをして……
「いっけぇぇぇぇぇぇぇぇ！」
次の瞬間……轟音と共に『何か』が激突し、物体を吹き飛ばした。

「な、何が……!?」
「な、何……？」
いきなりの展開に機動隊員と少女は目を白黒させ……現れたのは、『ちぐはぐ』な装備を身につけた少女だった。
頭には音楽プレイヤーが装備された黒とオレンジの角の様な物が着いたヘッドホンを着け、首には長いマフラーを巻き、背中には表が黒、裏地は赤のマントを身に付け右手には穂先を黒とオレンジで塗られた槍を左手にはパワージャッキの装備された籠手を装備しており、足にもパワージャッキを装備していた。
少女の装備はまるで複数の人物の装備を無理やり一つに纏めたような歪で奇妙な装備だった。
「あ、貴方は……英雄？」
「ううん。私『だけが』英雄じゃないよ」
少女はその質問に微笑みながらそう答えた。
「え……？」
「貴方を助ける為に走ってきた人や命令違反をしてでも駆け付けた警察の人達もそうだし……ほら、周りを見て？」
少女にそう言われて周りを見渡すと……
「大丈夫ですか？　今、助けます！」
倒れた老人を助け起こす学生……
「大人でしょうが！　そんなに押さないの！」
「ＡＣＥが来たんだからそんなに急がないでください！」
「此方です、早く！」
慌てて逃げる人々を必死に誘導する小学生と中学生の少年少女達……
他にも様々な人々が自分達に出来ることをしながら避難をしていた。
「私達みたいに表には出なくても、あんな風に誰かの為に頑張る人……それが英雄なんだよ！　だから……貴方もそんな英雄になれるように頑張ってね！」
そう言って少女は音楽プレイヤーを操作すると、歌を歌い始め……

まだ残っている物体を蹴散らしながら結晶の本体が残っている、町の外側に向かって走っていった。
「みんなが、英雄……」
「俺も頑張らないとな……」
残された少女と機動隊員はその言葉に笑顔になると、仲間のもとへと走り出した……
……なお、彼らを励ました少女はこの騒動が終わった後に命令違反兼ミサイルをサーフィンして現場に急行するという非常識な行動を取ったことで友人や教師にコッテリと絞られる事になるのだが……それは、別の話である。
これは、地球の危機を救った一人の英雄の物語――ではなく、英雄の陰に隠れて、後世の歴史書には記される事のなかった、一人の槍使いの物語……でもなく、異世界の英傑（装者）のシンフォギア（力）を歪に担い、仲間達を結束させて歪んだ英雄譚を破綻させた一人の歌姫の物語である。

第1話　邂逅

西暦二〇二五年、世界は一変した。
地上のいたる所に、巨大な結晶の柱『ピラー』が出現し、そこから現れた謎の結晶体『Ｃ（クリスタル・エネミー）Ｅ』の攻撃を受けたのである。
ＣＥは謎の光線を放ち、それを受けた人間は肉体には何の損傷もないのに、昏睡状態に陥ってどんな治療を施そうとも目覚めなかった。
まるで、魂を抜かれたかのように。
各国は全力をもってＣＥの殲滅にあたったが、事態は容易に進まなかった。
ＣＥは見えない膜でも張っているかのように、こちらの攻撃を頑強に阻んだからである。
もっとも、そのバリアらしき物も無敵とはいかず、大砲やミサイルを数発当てれば破壊できたのは僥倖といえよう。
戦車を、戦艦を、戦闘機を、陸海空のあらゆる戦力を惜しみなく投入し、無念の死を遂げた大勢の恨みを晴らすため、何千万というＣＥを破壊して押し返した。
しかし、人類の快進撃はそこで止まってしまう。
まるで無尽蔵のごとく湧いてくるＣＥに対して、武器弾薬の備蓄が底を突いてしまったのだ。
ＣＥ側は高い防御力と増殖力を持っていたが攻め手に欠け、人類側は高い攻撃力を有しながらも継戦能力に欠け、戦争は泥沼の膠着状態に陥っていく。

開戦から半年後、戦況を覆すほどの兵器が、東洋の島国で誕生した。
その兵器を手に戦場を駆ける、一人の少女と共に。
だがそれでも、ＣＥとの戦いに決着がつく事はなく、戦争は終わる事なく今も続いていた。
事態が再び動き出したのは開戦から六年後、西暦二〇三一年の春からであった。
群馬県前橋市の駅の前で一人の制服を着た少女が途方にくれてい

た。
「うわーん！　パパ～！」
「あわわ……な、泣かないで、ね!?」
少女……『音宮(おとみやひびき)響』は隣で泣いている幼稚園生くらいの少女を必死に宥めていた。
響は前橋市に来た直後に父親とはぐれて泣いていた少女を見つけ、話し掛けたのは良いのだが……そこから先は泣く少女によって話が進まないのである。
「ど、どうしよう……？　交番……は、関わった手前無責任だし……かといって、誰だかわからないこの子のお父さんを探しにいくのもなぁ……」
響はスマホの時計を見て時間を確認しながら頭を抱えてしまう。
「ええい！　こうなりゃ、入学早々遅刻なんて不名誉を被っても……」
「彼処にいる子ですか!?」
「カナ！」
「あ、パパ～！」
「あら？」
響は意を決して自分が学校に遅刻する事も厭わずに少女の父親を一緒に探そうとして……直後に少女の父親がやって来た事で転けた。
「良かった……怪我はないか!?」
「うん……あのお姉ちゃんがね、私が転んだ時に助けてくれてね、パパも探そうとしてくれたの」
「そうでしたか……娘を助けてくれてありがとうございます！」
「い、いえいえ！　人として出来ることをしただけですから！」
響はお礼を言ってくる父親に顔を赤くしてわたわたと慌てながらそれを受け入れた。
「『天道寺(てんどうじ)』君も一緒に探してくれてありがとう……お陰で助かったよ」
「いえ……娘さんが見付かって良かったです」
父親は一緒にやって来た少年にそう言うと、少年も照れくさそうにそう言った。

「それじゃあ私は此処で。学校がありますので！」
「俺も学校がありますので失礼します」
「お姉ちゃん、お兄ちゃん……バイバ～イ！」
　天道寺と呼ばれた少年と響はそう言って歩きだすと、父親は無言で頭を下げ、少女は笑顔で手を振った。
「えっと……天道寺君だっけ？　あの子のお父さんを連れてきてくれてありがとう。連れてきてくれなかったら、私は遅刻してでもあの子の父親を探そうと思ったての」
「そっか……俺は、幼い頃から家族が姉さんしかいなかったからさ。だから、必死にあの子を探すあの人を見捨てられなくて……俺も遅刻してでもあの子を探そうと思ってた」
「じゃ、似た者同士だね！」
　響のお礼の言葉に天道寺がそう答えると、響はそう言って笑顔になる。
「そう言えば、君の名前は？」
「あ、ごめん。言ってなかったっけ……私の名前は音宮響だよ」
「俺は『英人（あやと）』……天道寺英人だよ。宜しくね、音宮さん」
「うん！　宜しく……って、あれ？　そう言えば、天道寺君って……もしかして、『刹那（せつな）』さんの……？」
「え、ああ……確かに俺は姉さんの弟だけど……」
「そっか……私は六年前に刹那さんに救われたんだ」
「え!?　そうなのか!?」
　響の言葉に英人は思わず驚いていた。
「うん。だからさ……刹那さんみたいに活躍出来るようになろね！」
「……ああ！」
　二人はそう誓い合って……
「その前に早よバスに乗らんかい！」
「あ……ご、ごめんなさい！」
「す、すまない！」
　後ろにいた関西弁の少年に怒られたことで二人は慌ててバスに乗り込んだ。

バスに乗った後で彼らは自己紹介を始めた。
「さっきはごめんね……私の名前は音宮響。君の名前は？」
「ワテは『遠藤映助（えんどうえいすけ）』や宜しくな、音宮さん」
「うん、宜しくね！　って、隣の君は？」
響は何処か自分に対して格好をつけたような言葉遣いの映助を無視して彼の隣の席にいる何処か武人の様な雰囲気を持つ少年に話し掛けた。
「俺は『空知宗次（そらちそうじ）』。宜しく頼む」
「うん。宜しくね、空知君」
宗次や映助の自己紹介が終わった所で英人も自己紹介を始める。
「俺は天道寺英人だ。宜しくな」
「……天道寺やと？　自分、刹那ちゃんの家族か？」
「ああ、天道寺刹那は俺の姉だよ」
「……なんやろな、男やと刹那ちゃんと似ている目元が何でこんなに忌々しいんやろな」
「いや、それは八つ当たりの様な……？」
英人を睨むつける映助に響が呆れていると……
「……その天道寺刹那って人はアイドルか何かなのか？」
宗次の爆弾発言にバス中の人間がずっこけ、映助と響、英人による宗次への刹那という人物の説明会が始まった……
『聖剣の英雄』天道寺英人と『無双の槍使い』空知宗次、『絶唱の戦姫』音宮響の出会いは後世の作家によって劇的なものであったとされているのだが……実際はこんな感じであった。
そして……彼らは知らない。この邂逅こそが本来の歪んだ英雄譚を崩壊へと導く切っ掛けになった事を……

第2話　遭遇

前橋駅からバスで西に向かい利根川を越えると、急に建物の数が減り、荒れ果てた大地が姿を見せる。
「昔はここらにも人が住んでたんやろな」
「うん、そうだろうね……」
宗次の隣に座った映助や英人や響も、神妙な面持ちでその光景を眺めている。
所々に残る砲弾を受けて崩壊した住居や、焼かれて放置された田畑。
それは、人類がＣＥに受けた傷跡のほんの一部であった。
「ＣＥを倒せば時間がかかるだろうけど……きっと元に戻るよね？」
「ああ、きっと大丈夫さ」
響がぼつりと呟いた言葉に英人は肩に手を置き、微笑みながらそう言った。
「おっ、着いたようやな」
足止めされる信号もないので、十分とかからず目的地に着き、響達を含め乗客は全員が立ち上がる。
バスを降りた先に広がっていたのは、高い壁に囲まれた広大な敷地。
茶色の乾いた大地が延々と続く、殺風景な光景。
その中心に、無骨で角ばった建物がいくつも建っている。
此処こそが、彼らがこれから学び、そして戦っていく場所。
「対クリスタル・エネミー特殊隊員養成高等学校か」
「みんな特高としか呼ばんらしいけどな」
「名前が長いからねぇ……」
感慨深く立ち尽くす響達の横を、同じ制服を着た少年少女達が通り過ぎていく。
「おぉ！　宗次に天道寺、あれ見てみ！」
映助が歓声を上げて指をさすので、響達は何事かと首を向けた。
そこには、校門に背を預けて立つ一人の美少女がいた。

染めているのか、薄い桜色の長い髪を、両脇で縛りツインテールにしている。
子供っぽい髪型に反して、その四肢はスラリと長く伸び、胸は大きく膨らみながらも腰はキュッと引き締まり、全身から香るような色気を醸し出していた。
「ハイカラな子だな」
「激マブやん！　ワテ、ちょっと声かけてこようかな」
「うわぁ、同性の私の目から見ても可愛い。スタイルも私よりも断然良いし……」
「綺麗だな……」
都会の子は流石に違うなと感心する宗次の横で、映助は瞳にハートマークを浮かべて身をよじり、響は美少女の美貌やスタイルに遠い目になり、英人は少女に目を奪われる。
そんな二人の様子に気づいたのか、美少女はふとこちらを見たかと思うと、パッと花咲くように笑顔を浮かべ、響達の方に向かって駆け出した。
「えっ？」
「ま、待つんや、まずは交換日記からで……」
「いや、あの子の視線的に相手は……」
驚く宗次と、彼の背に隠れる映助に向かって、美少女は走り寄って――響の言う通りそのまま通り過ぎて、彼らの後ろにいた英人に抱きつこうとして……響を見て凍り付いた。
「……え？」
「？　私の顔に何か付いてるの？」
「え、あ、ううん。知り合いに似てたから思わず驚いちゃって……」
「そうなんだ。世の中には似てる人が三人もいるって言うしね……あ、私の音宮響。貴女の名前は？」
響は美少女が止まったのを見て慌てて顔を触るが……美少女は慌ててそう言い訳をすると、響はそれに苦笑いをしながら自己紹介をする。
「私の名前は『千影沢音姫（ちかげざわおとめ）』だよ。宜しくね、音宮さん！」

「えっ、隣に住んでた、あの音姫ちゃん!?」
「え、知り合いだったの!?」
「うん、ずっと会いたかったよ英人！」
　音姫は自己紹介をすると、驚いていた英人に抱き付くとそのまま唇を重ねた。
「なんでやぁぁぁ――――っ！」
「……都会の子は、凄いな」
「え？　再会して早々にキス？　え、え？　幾らなんでも速すぎだよ――――!?」
　一瞬で失恋して絶叫する映助と、ただ呆気に取られる宗次、余りにも唐突な展開に大混乱する響。
　三者三様な有り様と突然の展開に周囲の人間達も呆気に取られていた……

　……そして、それを見つめる二つの影がいた。
「……『フィーネ』、あれが『機械仕掛けの英雄（ヘロス・エクス・マキナ）』である天道寺英人？」
「ああ、『シェム・ハ』。あれが人類を救う人工的に作られた『デウス・エクス・マキナ（機械仕掛けの神）』にして哀れなる英雄（生贄）」
「……我らが友（刹那）の願いを踏みにじる愚行。すぐにでも救いだしたい」
「今は無理だ。見張りと人目が多すぎるし、準備が足りない。下手をすれば『幻晶（げんしょう）の民』に要らぬ憎悪が向きかねない」
「……本当に面倒な方向に進化した。『エンキ』が見たら泣きそう」
「……そうだな」
　フィーネと呼ばれた金髪の女性とシェム・ハと呼ばれた黒髪の少女は音姫に抱き付かれる英人に対する哀れみと人類に対する怒りを綯交ぜにした視線を向けながらもそれを行動に移すには準備が足りないと理解をしていた。
「……例の人間の準備が済むまで我らも水面下で動くぞ。私は教員として潜り込む」
「なら、私は生徒として天道寺英人を英雄にしない方向に徐々に誘導する」

「気取られるなよ?」
「フィーネこそ」
フィーネとシェム・ハは指を鳴らすと、何処にいても不思議ではない容貌の人間になり、校舎へと入っていった……
そんなやり取りがあったのに気付かずに響と音姫は歩きながらまるで昔からの友人であるかの様に仲良くなり……音姫が『響』、響は『音姫ちゃん』と呼び合う関係となったのであった……

第3話　正体不明

失恋のショックで抜け殻となった映助を英人と宗次が引っ張り、響達は特高の校舎に辿り着く。
見た目は普通の学校と変わらないが、実際は爆撃にも耐えられる建材を用いた、強固な砦であった。
「新入生の皆さん、まずは上履きに履き替え、教師の指示に従って地下に向かって下さい」
大声で生徒を誘導している男も、一見すると普通の教師と変わらないが、スーツでは隠し切れないほど胸板や四肢が筋肉で膨らんでいる。
「確かに、普通の学校じゃないな」
「だねぇ……流石はＣＥと戦うための学校だね」
改めて気を引き締めつつ、響達は昇降口で教師から指定の靴を貰い、それに履き替えて階段を下りる。
普通の学校と変わらなかった地上部分と違い、地下は無骨なコンクリートの通路に金属の扉が並ぶ、どこか不気味な場所であった。
教師の案内で通された部屋も、コンクリート打ちっぱなしの壁にパイプ椅子が並べられただけと、殺風景で不安を抱かせる。
「まるで悪の秘密基地だな」
「それは失礼じゃないかな？」
「いいえ。その男の子の言う通りで、大体そんな感じよ」
宗次の独り言に反論した響の言葉に返事がきて、少し驚きながら響と宗次は声の主を探す。
そこには壁に背を預けてタブレットＰＣを操作していた、白衣を着た科学者風の美女が軽く手を振っていた。
「うほっ、超イケてるお姉様やんっ！」
「おいおい……」
「男って、単純よね……」
美女を見てあっさり復活した映助に英人や音姫が呆れ、宗次は視線で「貴方は誰ですか？」と問う。

すると、彼女は妖艶な笑みを浮かべ、集まった生徒達の前に出て名乗った。
「皆さん、特高にようこそ。私はここの研究員と養護教諭をしている『保科京子（ほしなきょうこ）』よ」
「京子先生か、美人保健医とか最高やな！」
「うわぁ……あのスタイル、どうやって維持してるんだろ……」
映助に限らず男子生徒のほとんどは、京子の白衣を押し上げる大きな胸や、タイトスカートから伸びる、黒ストッキングに覆われたおみ足に目が釘付けとなっている。
……響を中心とする一部の女子もその抜群のスタイルを維持している事に羨望の目を向けていたが。
「さて、ここに居る以上、皆さんは既にご存知だと思うけど、改めて特高がどんな所か説明させてもらうわね」
「「は～いっ！」」
「「……ちっ」」
一部を除いた男子が一斉にふぬけた声で答え、それを見た女子達は心底嫌そうに舌打ちする。
「うわぁ……早速空気が悪くなってる……」
「男の子が単純なのが悪いんじゃないかしら？」
響がそんな男女で別れた空気に冷や汗を垂らしていると、音姫はそんなに心配しなくても良いと答える。
「対クリスタル・エネミー特殊隊員養成高等学校の名前通り、本校はＣＥから日本を守るための隊員を育てる学校よ。そして――」
一度言葉を切り、集められた生徒一人一人の顔を見てから、大声で宣言する。
「皆さんは対ＣＥ隊員『Ａｎｔｉ　Ｃｒｙｓｔａｌ　Ｅｎｅｍｙ』、略して『ＡＣＥ（エース）』の隊員となる素質に恵まれた、約五千人に一人の選ばれた逸材なのです！」
賞賛の言葉に、生徒達の多くは胸を張り、得意げに鼻を高くする。
響もまたその言葉に胸を熱くする。
（素質かぁ……試験の際に試験官とかに凄い驚かれたなぁ……）

三年前より全国で行われるようになった、エース隊員を選抜する試験で響は前代未聞の数値を叩き出したらしく、試験を受けてから一週間は家に帰れなかった事を思い出していた。
「ＣＥの登場により、我々人類は深い傷を負ってしまいました。ですが、引き換えに発見された物があります。それが『幻子（ファントム・マター）』であり、幻子を用いた新たなる武器『幻想兵器（ファンタズム・ウェポン）』なのよ！」
その単語を耳にして、生徒達から興奮のどよめきが上がる。
誰もがネットに上げられた動画で、それを目にしていたからだ。
選ばれた若者だけが扱える、まさに幻想的な伝説の武器。
「私にはどんな武器が出るんだろ……？」
響はどんな武器が出るかを心配していた。
「みんな、早く手にしたいって顔をしているわね。ではリクエストに応じましょうか」
京子の声に合わせて部屋の扉が開き、台車を押した教師達が入ってくる。
台車に積まれていたのは、メタリックな輝きを放つ黒い大きな腕輪。
「これは『幻想変換器（ファンタズム・コンバーター）』。幻想兵器を生み出す装置であり、貴方達の身を守る盾にもなってくれる、エース隊員の証よ」
京子は運んできた教師達と共に、幻想変換器を生徒に配っていく。
「これがあのコンバーターか」
「凄え、超格好いい！」
「これが、私のコンバーター……」
「姉さんも使ってた物を俺も使えるなんてな……」
響と英人も周囲の生徒の様にはしゃぎこそしなかったが、感慨深そうに腕に嵌めた幻想変換器を撫でる。
一部を除いてはしゃいで受け取る生徒達を見て、京子は優しく微笑む。
「受け取ったら利き腕にはめてね。ただし、ロックがかけてあるから幻想兵器は出せないわよ」
「え～っ！」

「まあ、しょうがないよね……」
生徒達から不満の声が上がるが、それも予想済みと京子は笑みを崩さない。
「慌てないの。直ぐに使わせてあげるけど、一人ずつデータを取りながらね。そういうわけで、一番前の席に座っている子達は私について来て」
手招きして部屋から出ていく京子の後を、最前列の生徒十数人が追いかける。
「うう、緊張してきた……」
「響、大丈夫？　深呼吸をしてみたら？」
緊張して身体が硬直する響を音姫は背中を擦り、声をかけて響に深呼吸をさせる。
「すーはー……大分ましになったよ。ありがとう、音姫ちゃん！」
「どういたしまして。私も緊張してるもの、だったらそれを解すのは当然でしょ？」
「そうだね！」
音姫と響はそう言って笑い合う。そうこうしている内に響達の番が来た。
「三列目に座っている子達、ついて来て下さい」
「はい」
皆緊張した面持ちで立ち上がり、呼びに来た教師の後を追う。
案内された部屋の中は、先ほどと同じくコンクリート壁の殺風景な物。
ただし、壁の片面がガラス張りになっており、その向こうでは京子をはじめ、白衣の学者達が忙しく機械を操作していた。
『じゃあ一番右の子からいこうか。名前を言って部屋の中央に立って』
「音宮響です！　宜しくお願いします！」
『元気一杯で何よりだわ』
スピーカーから響いた京子の指示に、響は元気よく挨拶をして部屋の中央に歩みだす。

『ではロックを解除したので、変換器をつけた腕を前に出して、『武装化（アームド）』と唱えて。それで幻想兵器が形成されるわ』
「はい……武装化！」
気合いを入れた響は言われた通りの単語を叫ぶ。
すると、幻想変換器から光が迸り、それが響の掌に集まっていく。
「凄い……本当に私は、エースになったんだ！」
歓喜する響の掌の中で光は形を成し……響の頭の中に音が響き渡る。
Ｂａｌｗｉｓｙａｌｌ　Ｎｅｓｃｅｌｌ　ｇｕｎｇｎｉｒ　ｔｒｏｎ
Ｉｍｙｕｔｅｕｓ　ａｍｅｎｏｈａｂａｋｉｒｉ　ｔｒｏｎ
Ｋｉｌｌｉｔｅｒ　Ｉｃｈａｉｖａｌ　ｔｒｏｎ
Ｓｅｉｌｉｅｎ　ｃｏｆｆｉｎ　ａｉｒｇｅｔ―ｌａｍｈ　ｔｒｏｎ
Ｖａｒｉｏｕｓ　ｓｈｕｌ　ｓｈａｇａｎａ　ｔｒｏｎ
Ｚｅｉｏｓ　ｉｇａｌｉｍａ　ｒａｉｚｅｎ　ｔｒｏｎ
Ｒｅｉ　ｓｈｅｎ　ｓｈｏｕ　ｊｉｎｇ　ｒｅｉ　ｚｉｚｚｌ
「ず…あ……!?」
響は一斉に響き渡る音に膝をつき、頭を抑える。
『音宮さん、大丈夫!?』
「い、いえ……だ、大丈夫です。ちょっとふらついただけですので……」
響は頭を抑えて立ち上がりながら己の手の中に現れたペンダント状のそれを見つめる。
「これって、さっきの歌で起動するのかな？　それじゃあ……」
『え？　これ……どうなってるの？』
響は頭の中に浮かんだ歌の内の一つを歌おうとして……京子が驚いたような声を出したのでそれを中断してしまう。
「京子先生、どうしたんですか？」
『ああ、ちょっと気になる結果が出たから……外に出てて』
「あ、はい。わかりました」

響は京子の指示に従って部屋から出る。
（一体どうしたんだろ？）
何が気になったのかを疑問に思いながら……
「これ、どういうこと？」
京子は響の幻想兵器の由来を調べた際に出た名前に疑問に思う。
何故ならば、その七つの名前は何も繋がりがなかったからだ。
北欧神話の主神オーディンが振るいし神槍『グングニル』
同じく北欧神話の狩人の神ウルの持つ神弓『イチイバル』
日本神話において天叢雲剣と双璧をなす知名度を誇る神剣『天羽々斬（あめのはばきり）』
ケルト神話の主神ヌアザの腕に由来する『アガートラム』
メソポタミア神話の女神ザババの持つ双剣『イガリマ』と『シャルシュガナ』
銅鏡の一種である『神獣鏡（しんじゅうきょう）』
余りにも統一性がなく、無茶苦茶なラインナップに京子は疑問符を浮かべたが……すぐに次の生徒の番になった為に終わってから調べようと考えた。
……彼女がこれらの関連性に知るのは、それからかなり後の事である。

第４話　目標

幻想変換器の起動に成功した生徒達は、校舎外のグラウンドで待たされていた。
「もうええ、ワテはサバンナで暮らしたる……」
「……何があったの？」
「実はね……」
何故か猛烈に拗ねている映助を見て響が何事かを音姫に問い掛けると、音姫は苦笑いをしながら話し始める。
音姫曰く映助の幻想兵器は『オリーブ（クラブ・オブ・オリーブ）の棍棒』。
ヘラクレスの使っていた棍棒であり、能力は……『ライオン相手だとダメージが増える』。
「……能力の使い所が難しいなんて程じゃないよね？」
「そうなのよね～……」
しょんぼりと落ち込む映助に何も言えない響と音姫だった。
「そう言えば……音姫ちゃんと天道寺君、空知君の幻想兵器はなんだったの？」
「空知君の幻想兵器は天下三名槍の一振『蜻蛉切』よ。能力は『乗った蜻蛉が切れちゃうくらい鋭い』ですって」
「あ、本多忠勝の槍なんだ……凄い！」
響が三人の幻想兵器を音姫に聞くと、音姫は先ず宗次の幻想兵器について言う。
「私はアーサー王伝説の聖剣『ガラティーン』よ」
「えっと……確か、太陽の騎士って言われた『ガウェイン』の剣だよね？」
「そうね。能力は『午前９時から正午の３時間と午後３時から日没までの３時間だけ力が３倍になる』よ。正直言って当たりの部類よね」
「伝説で言われてる能力まんまだね……」
音姫の幻想兵器の能力に驚く響に音姫は苦笑いをする。
「で、英人のは……」
「おい、それマジかよ」

「本当だって、あいつきっと天道寺さんの弟だよ」
　音姫が英人の幻想兵器について説明しようとすると、そんな会話が響達に聴こえてきた。
「あ～……やっぱりバレたんだ」
「しょうがないよ、名字が同じなんだもん。……でも、刹那さんは刹那さん、天道寺君は天道寺君なんだから過剰な期待はしないでほしいなぁ……」
「……何かそれで嫌なことを経験したの？」
「中学の友達がＣＥのせいで昏睡したお姉さんと同じ道を歩くように親に過剰な期待をかけられてノイローゼ起こして自殺しそうになったからね……」
「うわぁ……」
　響の生々しい体験談に音姫はドン引きする。
「だからね、私は三つの目標を立てたんだ」
「その目標って？」
　響が胸を張りながら言った事を音姫は首を傾げながら聞く。
「先ずは長野ピラーを倒して、長野ピラーから出現したＣＥに殺された人達の仇討つこと。それをしないと人は前に進めないからね。……私を含めて」
「じゃあ、響は……」
「うん。６年前の侵攻時にお父さんもお母さんもＣＥに、ね……」
　響は音姫の言葉に寂しそうな顔になる。
「次に、６年前にはぐれちゃった親友の女の子を探すこと」
「それって、どういうことだ？」
　響の言葉に近くで聴いていた英人がそう聞く。
「うん。６年前に一緒に刹那さんに助けられた子がいて……短い間だったけど、友達だったんだ。私はお祖父ちゃんとお祖母ちゃんに引き取られてから音信不通になっちゃって……だから、その子を探したいんだ！　……まあ、その子も刹那さんに憧れてるだろうからひょっとしたら、特高で再会できるかもしれないけど」
「そ、そうね。再会できると良いわね……」

響の言葉で何故か動揺しながら音姫はそう言う。
「っで、三つ目は……」
響が三つ目の目標を言おうとするが、その辺りで新入生全員の起動テストが終わったらしい。
保科京子を含む教師陣もグラウンドに出てきて、約百五十名の新入生に呼びかけた。
「皆さん、幻想変換器の起動テストの成功おめでとう。続いて幻想兵器の稼働テストを行います――実戦形式でね」
「「えぇっ!?」」
思わぬ発言に、生徒達の間から驚愕の声が上がる。
しかし、京子は慌てないでと手を振って制する。
「安心して、ちゃんと怪我がないよう、変換器から『幻子装甲（ファントム・アーマー）』が発生しているの。気づいてないだろうけど、皆はもう装甲車より硬くなっているのよ」
「え、そうなの!?　音姫ちゃん、ちょっとごめんね」
「うん。大丈夫よ」
驚いた響は許可を貰って音姫の肩を叩こうとするが……透明な膜でもあるかのように、当たる直前で弾かれてしまった。
「実感できたかしら?　その強固な鎧と幻想兵器という剣があるからこそ、エースはＣＥと戦える最強の兵士なのよ」
「成る程～……」
隣の者と確認し合う生徒達を見て、京子は優しく微笑む。
「幻子装甲は貴方達の幻子干渉能力――分かりやすく言うとＭＰね、これが切れると使えなくなるけど、それまではほぼ全ての攻撃を防いでくれるし、切れる前には警告音が鳴るから、幻想兵器で斬り合っても安全に試合ができるわけ」
（確か、私の幻子干渉能力が機械にエラーが出るレベルで高かったから帰れなかったんだっけ?）
それなら安心だと、生徒達もほっと胸を撫で下ろす中で響は研究員に言われた自分が帰れなかった理由を思い出す。
「それに、皆もせっかく手に入れた幻想兵器だもの、一度はちゃんと

使っておきたいでしょ？」
（……頭の中に浮かんだ歌とあれ（ペンダント）でどうやって戦えば良いんだろう？）
響は自身の幻想兵器を思い出しながら、溜め息を吐く。
「では、相手が決まった人から前に出てきてね」
開始の合図にパンと手を叩くと、生徒達は戸惑いながらも二人組を作って、京子達の前に出ていった。
「宗次、ワテらも行くか」
「悪い、また今度にしてくれ」
「なんでやっ!?」
「ん？」
映助の誘いを断り、英人に向かって歩き出した宗次に響は疑問に思うのだった。
そして、彼女の幻想兵器の本当の姿の一つを知るのはこのすぐ後の事であった……

第５話　覚醒

「天道寺、ちょっと良いか？」
　宗次は英人に話し掛けた事で色んな人間から注目されているにも物怖じしていなかった。
「空知、どうしたんだ？」
「俺と試合をしてくれないか」
（あ、成る程ね。でも、天道寺君と刹那さんは家族だけど別人なんだから、期待しすぎるとダメなんだけどなぁ……）
　そう直球で申し込むと、英人は驚いたように目を見開いたが、直ぐ不敵に笑って頷いた。
　……その後ろで響は宗次が映助との試合を断った理由を理解するも、彼がやって来た理由も理解してしまった為に心配もしてしまった。
「いいぜ、受けて立つ」
「ちょっと英人!?　貴方の相手は――」
　音姫は何故か慌てて止めようとしたが、英人は気にせず教師の元に向かい、宗次もその後に続いた。
「先生、俺達にも試合をさせてくれ」
「了解よ、天道寺英人君と……へぇー、君がね」
　京子は宗次の顔を見ると、かなり驚いた顔をしたが、直ぐ真顔に戻って隣の教師を呼んだ。
「木村先生、この子達の試合をちょっと見て貰えますか」
「はい、任せて下さい」
　木村と呼ばれた男性教師は、奇妙なほどにこやかに笑って、二人をグラウンドの中央へ招く。
「聞いた、彼って天道寺刹那の弟なんだって」
「マジで!?　これは見逃せないわね」
（……不味いよなぁ。みんな、天道寺君に刹那さんと同じくらいの期待を押し付けてる。期待する気持ちはわかるけど……天道寺君だって私達と同じ一年生なんだよ？）

恐る恐る幻想兵器を打ち合わせていた他の生徒達も、それを見守っていた他の教師達も、手を止めて英雄の弟に注目する。
そして、そんな生徒達に響は危機感を抱いていた。
「宗次、頑張れや！」
「あぁ、頑張るよ」
生徒達には見られていなかった宗次だったが彼を応援する映助に手を挙げて応え、蜻蛉切を呼び出す。
「武装化っ！」
英人も幻想兵器を生み出すが、それは一本の両手剣だった。
綺麗な装飾の施された西洋剣だが、どんな伝承の武器か、外見だけでは判断が付かない。
（西洋って、剣型の伝説の武器は多いからな～……エクスカリバーかデュランダル、バルムンク辺りかな？）
響は英人の幻想兵器がなんなのかを予想しながら試合の始まりを待つ。
すると、宗次は槍を半回転させ、石突の方を英人に向けた。
（……空知君って武術の経験者なのかな？　槍の扱いに手慣れている様な……？）
槍を半回転させた動きの滑らかさに響は彼が武術の経験者なのではないかと疑問に思う。
「何あれ？　槍を使うまでもないって事？」
「お前なんて本気を出すまでもないって舐めてんでしょ、サイテー」
「多分だけど……幻子装甲があるからって、いきなり他人に刃物を向けるのを避けようとしたんじゃないかな？」
英人のルックスに惚れた女子達から、心無いヤジが飛んでくるが響はそんな女子達に宗次が何故そうしたのかを説明する。
「音宮の言う通りだ、俺はただ――」
宗次も女子達に説明をしようとして……
「うおおおっ！」
「いや、合図は!?」
審判の合図も待たずに英人は宗次に向けて突っ込み、響は殆ど不意

打ちとも言える行動をした事にツッコム。
「せいやっ！」
英人は人間相手だというのに、容赦なく宗次に向けて真剣を振り下ろしてくる。
躊躇いのないその攻撃を、宗次は柄の中程で受け止めな、響は自分が感じていた危機感は正しかったと考えていた。
（やっぱり……）
「うおおっ！　はあっ！」
（天道寺君……私達（ド）と同じ（素人）だ!?）
英人は雄叫びを上げ、何度も何度も宗次に斬りかかる。
だがそれは、まるで金属バットを振り回すような、力任せで勢いだけの攻撃だった。
とてもではないが、剣術はおろかいかなる武術も納めていない、響の言う通りのド素人の動きである。
「君は、本当に天道寺刹那の弟なのか？」
（やっぱり、空知君も天道寺君と刹那さんを同一視してたんだ……）
響は英人の攻撃を容易く捌きながら、疑問を口に出した宗次に頭を抱える。
「今まで姉さんの活躍を知らなかったくせに、姉さんの名を勝手に呼ぶなっ！」
「えっ？」
（……天道寺君も刹那さんの弟だからって、色眼鏡で見られた事があるのかな？　それに、宗次君が刹那さんを知らないって言った時に怒りの表情を見せてたし……それだけ刹那さんが大切だっんだね……）
宗次の質問にいきなりキレた英人を見ながらそう考える。
そして、同時に特高に来るまでの間に色々な人物に姉と比べられてしまった時もあるのだろうかと思う。
「すまなかった」
「何っ!?」
「いきなり謝っても意味がわからないよ!?　いや、刹那さんと天道寺君を同一視したのを謝る意味だったんだろうけど！」

いきなり謝罪してきた宗次を、英人は訝しみつつも懲りずに斬りつけてくる。
響は英人に向かって謝った宗次の意図を理解しつつも、いきなり謝っても意味不明だとツッコミをいれた。
そうした後に英人の斬撃を柄で受け止めると、宗次はがら空きになっている英人の腹を蹴り飛ばす。
「ぐふっ！」
「そんな、足を使うなんて卑怯よ！」
「え、武器を使うだけが戦闘じゃないよ!?」
外野の女子から見当違いのヤジに響は目を剥いたが、戦闘態勢に入った宗次の耳にはもう届いていなかった。
距離が離れ、丁度槍の間合いとなった英人に向かって、矢よりも鋭く石突を繰り出す。
「うおっ!?」
「速い!?」
肩を突かれよろめいた英人に、宗次は体勢を立て直す間など与えず、上から頭を殴りつけ、横から足を薙ぎ払い、トドメに胸を突き刺す。
空壱流槍術・全方撃
名前通り、槍で行える『打、払、刺』という全ての方法で、『上、横、前』と全方向から攻撃を放つ連続技である。
「うわぁぁぁ――――っ!?」
「天道寺君！」
怒涛の三連撃を全てまともにくらった英人は、悲鳴を上げて地面に転がるのであった。
「ふぅ……」
宗次は軽く息を吐きながらも、構えを解かず残心を怠らない。
「槍を握れば常在戦場」が彼の祖父の口癖だったからだ。
「「……」」
「ぐ……ま、まだだ！」
思いもよらぬ宗次の強さに観衆が静まり返るなか、英人はふらふら

になりながらも剣を支えに立ち上がる。
「俺は、姉さんにずっと守られてきた！　姉さんと同じように強くなりたいと思った矢先に姉さんは死んでしまった！　俺がもっと強ければ、姉さんを助けられたかもしれないのに……！」
「天道寺君……え？」
　響は英人の血を吐くような言葉に胸が熱くなり……同時に英人から大事な何かが失われる様な感覚を疑問に感じる。
「強くなる為に此処に来たんだ！　だからこそ……こんなところで、敗けられるかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
　英人はそう叫びながら剣を大上段に構えると、剣から黄金の光の刃が出現する。
「シェム・ハ、妨害を！」
「わかってる！」
（あ、ああ……あ？　なんで？　なんで、あれを見ていたら……怖いの？　あれは、あれは……天道寺君を彼で無くさせるの……？）
　響は後の方から聴こえてくる会話を気にする余裕もなく、恐怖に震えていた。
　その光の刃は凄まじい圧力を放っており、離れていても肌がビリビリと震えるほどであった。
　そして、響は光の刃が英人から何かを吸いだしている様な感覚にいてもたってもいられなくなった。
「エクスカリバァァァ――――っ！」
「ダメーーーー！」
「な……!?」
「響、戻って！」
　英人が宗次に向かって光の刃を振り下ろすのと同時に響は走り出していた。
「武装化ーーーーー！」
　響は自身の幻想兵器を出現させると、胸の中に浮かぶ歌を歌い上げる。

「Ｂａｌｗｉｓｙａｌｌ！」
その言葉と共に槍を携えたオレンジ色の髪の女性が響に重なる。
「今のは……!?」
「Ｎｅｓｃｅｌｌ！」
次に槍を携え、背中にマントを羽織ったピンク色の髪の女性が響に重なる。
「ま、またや……」
「ｇｕｎｇｎｉｒ！」
次に長いマフラーを首に巻いたグレた様な表情の黄色の髪の少女が響に重なる。
「何が……!?」
「こ、この力は一体……!?」
「ｔｒｏｎ！」
最後に先程の少女に似ていながらも何かが違う少女が重なり……
響の左腕は光の刃を握り締めた。
「な……!?」
「バカな……!?」
京子と木村と呼ばれた教師の愕然とした声が上がり……
「ぶっ壊れろぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！」
「音宮、待て！」
響は右手に握ったオレンジと黒に塗り分けられた槍を展開して光の刃に向けると宗次の言葉を無視し……
ＨＯＲＩＺＯＮ†ＳＰＥＡＲ
そこから砲撃を発射し、光の刃を爆風と共に吹き飛ばした。
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」
「ぐぅ……!?」
英人はその爆風によってゴロゴロと転がり、宗次も蜻蛉切を地面に突き刺して堪えるも体勢を大きく崩し、後ろにいた生徒達も大勢が尻餅をついたり、倒れたりした。
そして、爆心地にいた響は……
「はぁ……はぁ……ああ、良かっ…た」

彼女が纏っていた装備は霧散し、元のペンダントへと戻り、爆風に煽られた事で煤だらけになっていたが……誇らしげに笑っていた。
（あれが……これ、の…真のすが……た）
「音宮さん！」
響は己の幻想兵器の真の姿に驚きながら意識を失い……
「……音宮響。お前は、何者だ？」
それを特徴のない平凡な少女が支えると……何処か、興味深げにかつ警戒をするかの様にそう呟いた。
……此処に、歪んだ英雄譚は噛ませ犬の誕生に失敗し崩壊へと向かって行くのだが……それを知るのは一部の大人達とそれを阻止せんとする者達のみであった。

【英傑達の英雄譚・第一章『英傑の邂逅』　２６ページより】

「空壱流槍術・全方撃！」
「うわぁぁぁ――――っ!?」
　宗次の蜻蛉切から繰り出された打、払、刺の槍が出せる攻撃を全方向から食らい、英人は大きく吹き飛ばされた。
（つ、強い……！　俺と同じ年齢でどうやったら此処までの強さを……!?）
　英人は地面を転がりながら、自分と同い年の宗次の強さに愕然とする。
　その宗次は転がった英人に油断する事なく槍を構えていた。
　彼の祖父の口癖である「槍を握れば常在戦場」を理解しているからだ。
「……あれが天道寺さんの弟かよ」
「なっさけねえな」
「刹那さんも可哀相よね」
「ちょっと、やめなさいよ！」
「そうや、誹謗や中傷はするもんやないで！」
　英人が剣を支えに立ち上がろうとしていた所にそんな嘲りの声『のみ』が聴こえる。
　思い出すのは、姉と同じように英人を見て少しでも失望したら掌を返したかの様に冷たい目で見る人々……恐らくだが、人類最大の愚行となりかかった『ヘロス・エクス・マキナ（機械仕掛けの英雄）計画』の望む英雄像から英人を外さないためのサクラだろう。
　そして、ふらつきながら立ち上がる英人を『やはり立ち上がったか』と目で言う様に一歩踏み出す宗次と心配そうな目で自身を見る音姫と響……
（嫌だ、俺を知らない人に失望されるのはまだ良い。だけど、俺を姉さん（英雄）の弟じゃなくて、俺個人として見てくれた二人と音姫に失望さ

れるのだけは……）

「嫌だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

英人は咆哮と共に立ち上がり、己の頭の中に浮かんだ幻想兵器の力を解放する。

人の幻想と妄執によって歪められた世界最古にして至高の聖剣から泣きも笑いも恋もする一人の人間を何の感情も抱かせようとしない歪んだ英雄（人形）へと変貌させる光の刃が出現した。

「お、おい……」

「あれ、ヤバいんじゃ……!?」

「英人……!?」

「天道寺君……？」

「天道寺、待て！」

そんな彼を中傷した人間やそれを制止した人間、音姫に響や宗次が様子のおかしい英人に声をかけるが……

今の英人には目の前の『打ち倒すべきかませ犬（空知宗次）』しか見えていなかった。

「エクスカリバーぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

「嘘だろぉぉぉぉぉ!?」

「逃げろ！」

「生徒達の安全を確保するんだ！」

「ダメだ……間に合わない！」

英人が渾身の一撃を振り下ろし、それから生徒達は慌てて逃げようとし、教師達も生徒達を逃がそうとするが……逃げるには余りにも時間が無さすぎた。

「……やるしかない！」

宗次はそんな生徒達を見て蜻蛉切を横一文字にして上に向けると、振り下ろされた光の刃を防ごうとする。

……もしもの話だが。『歌姫』がいなかった場合、これによって空知宗次は敗れ『かませ犬（英雄のアクセサリー）』として歴史に名を刻まれ、天道寺英人は機械仕掛けの英雄への第一歩を踏み出していただろう。

「ダメーーーー！」

しかし、彼女はそこにいた。迷子になった少女の父親と共に探し回り、少女を見付けて安心で微笑んでいた普通の好青年である天道寺英人を守らんと駆け出していたのである。
「『Ｂａｌｗｉｓｙａｌｌ　ｎｅｓｃｅｌｌ　ｇｕｎｇｎｉｒ　ｔｒｏｎ』！」
音宮響は己の胸の中に浮かぶ歌を歌い上げ、そこから現れた光の塊に己の身体を突っ込ませる。
そして……
「ＨＯＲＩＺＯＮ†ＳＰＥＡＲ――――！」
響が放った必殺の砲撃が光の刃と拮抗し、絡み合うと互いを打ち消しあった。
「うおぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
英人は即座にエクスカリバーで砲撃を放った人物に斬りかかり……響はそれを身体で受けつつ、英人を抱き締めた。
「え、あ……？　お、音宮さん……？」
「大丈夫だから。一人で刹那さんみたいにならなくても良いから……」
エクスカリバーを叩き込まれた部分から血を流しながらも、響は英人の頭を撫でる。
「う、あ……」
「だから、だから一緒に頑張ろう？　私達と一緒に刹那さんみたいな英雄になろう？」
「く、うううぅ……うう……」
英人の手の中からエクスカリバーが滑り落ちて砕け散ると、英人は目を閉じて眠りこけ……全てを包み込む夜の様ゆ優しい漆黒の槍……響の『最初の』幻想兵器にして最も信頼する愛槍になる神槍『グングニル』が砕け、響もまた英人を落とさぬようにしながらゆっくりと崩れ落ちた。
此処に天道寺英人を歪んだ人類の英雄にせんとする計画は崩壊を始め……人類を救う数多の英傑達誕生への産声をあげたのだった。
――――――――――

「うっきゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」
「ぶへえ!?」
　響は気恥ずかしさの余りに読んでいた小説を叫びながら同じく小説を呆れた様な顔で読んでいた映助に叩き込んだ。
「な、ななな……何でこんな本があれから数年しか経ってないのに書かれるわけ!?　おかしいでしょ！」
「数年しか経ってないからよ。定説が出来るまで想像で書けるもの」
「うーうーうー！」
　響は顔を真っ赤にしながら小説に対して文句を言うも、隣で読んでいた少女の言葉に涙目になり唸りながら少女にあやされる。
「……この小説の俺はなんで技名を叫びながら攻撃しているんだ？　避けられたり、対策をたてられるだろうに」
「いや、それはそうなんだが……」
「ツッコミをいれる所はそこやないやろ……」
　宗次の確かに気にはなるがそこではないツッコミに英人と英人に助け起こされた映助が呆れた顔で溜め息を吐いた。
「うう……久々に特高の皆に会うのに恥ずかしいよ～！」
「いや、他の皆も同じように捏造とかで書かれてるから……恥ずかしさは同じよ。……まあ、主役格の響と天道寺君と空知君は多目だけどね」
「うわーん！」
　少女の言葉に響はこれから会う仲間達にどんな顔で会えば良いのだろうと思いながら手で顔を覆いながら悶えるのだった……

第二章・依怙贔屓?それでも少女は前を向く

第6話　幻想兵器と暗躍する者

少女は音楽プレーヤーから流れる歌を聴きながら、最後になった食料を食べていた。

「……いきるのを、あきらめない」

少女は母と父を失い、折れかけた己の心を奮い立たせてくれた言葉を呟きながら食べ終えた後膝を抱えて座る。

「いきるのを、あきらめない……!」

少女は再びその言葉を呟き……

「大丈夫!?」

その言葉と共に閉ざされていたドアが吹き飛んだ。

少女がそこに顔を向けると、そこには大剣を手に持った黒髪の日本人形の様に愛くるしい少女がいて……

ーーーーーーーー

意識を取り戻した響の目に映ったのは、見知らぬ天井と見知った白衣の美女。

「京子、先生?」

「えぇ、どこか痛む所はない?」

微笑み心配してくる美人保健医に、響は起き上がりながら質問をする。

「痛むところはないです。……先生、あれからどうなったんですか?

みんなは、天道寺君や空知君は無事なんですか?」

「……君って子は、起きて最初に言うのがそれ?」

自分の事よりも、友人や他人の身を心配する響に、京子は呆れと感心の混じった笑みを浮かべる。

「大丈夫よ、君が頑張ってくれたおかげで、皆直撃は免れたから」

「良かったぁ……」

安堵の息を吐きつつ、響は己のコンバーターを見つめて微笑んだ。

「ありがとう、あなたのお陰だよ。あ、そう言えば京子先生……私の幻

想兵器って、なんだったんですか？」
　響は自身の幻想兵器が皆を救ってくれたのだと呟いた後で言われていなかった自身の幻想兵器の名前を質問した。
「ああ。あなたの幻想兵器は北欧神話の主神オーディンが振るった槍……『グングニル』だったわ」
「うわぁ、凄いメジャーな武器だったんだ……ん？」
　響は京子から告げられた幻想兵器の名前にテンションが上がるが……次の瞬間、疑問が沸き上がった。
「あの、京子先生。中学の友達が幻想兵器を『小説やアニメとかで人が思う『この武器はこうだ！』っていう幻想を当てはめた物だ』って考察した事があるんです。実際に天道寺君のエクスカリバーはＦａｔｅ／シリーズの『約束された勝利の剣（エクスカリバー）』でしたし」
「へえ……中々に鋭いお友達ね。その考察は合っているわ」
　響の中学時代の友人の考察に京子は少しばかり感心した後でそれを肯定する。
「だったら、私のグングニルは何の幻想が基になってるんでしょうか？　服装は変わるし、槍は持ってたけど……なんか格闘戦しそうな装備もありましたし……」
　響は己の幻想兵器の姿を思い出しながらその疑問を口にする。
　ピッチリとしたオレンジと黒が入り雑じった衣服に穂先に黒とオレンジが混じった槍、パワージャッキを装備した小手に足の装備にマントとマフラーという両方身に付けるのはおかしい装備……
「なんか、複数の人間のイメージを無理やり一つに纏めた様な装備だったんですよね」
「う～ん……ちょっと、わからないわね。もう少し詳しく調べられれば良いんだけど……」
　響の言葉に京子は考え込むが、響はそれに対して苦笑いをしながらこう言った。
「まあ、ちぐはぐでちょっと身に付けるには恥ずかしい装備だけど……私の幻想兵器なんだから、付き合っていきます」
「そう？　そう思っているなら、私も何も言わないわ」

響はそう言って保健室のベッドを降りて……
「あの～……もう行っても良いですか？」
「後日再検査をするけど、今日はもう帰って良いわよ。あ、貴女の寮は十二番棟よ」
「ありがとうございます。今日はご迷惑をおかけしました」
そう言って出ていった響とすれ違う様にして長い黒髪を後ろでまとめ、三角形の眼鏡を光らせた、ＴＨＥ女教師という格好の美女が入ってきた。
「あら、『綾子（あやこ）』。……疲れているみたいだけど、どうしたの？」
美女……京子の友人であり、この学校の教師でもある『色鐘（いろがね）綾子』が疲れたような表情だったのを見て何事かを問い掛けた。
「いや、な。天道寺英人がかませ犬への逆転劇に失敗した事を報告した際に政治家連中が怒るのはまだ良いんだが……阻止した生徒を退学させたり、転校させたり果ては暗殺しろだなんて無理難題を出されてね」
「それはまた……」
京子は綾子から聞かされた要人達の言葉に呆れたような表情になる。そもそも入学したばかりの人間を退学にしたり転校させたりしたら目だって仕方ないし、暗殺なんぞもっての他である。
「それと、本来なら天道寺英人を九番棟に入れなければいけなかったんだが……」
「そっちでも何かあったの？」
「何も知らない一般人を寮母として雇っていたのと、天道寺英人を英雄にしようとする関係上、九番棟に女子しかいなかったのが災いしてな……『女子寮に男子を入れるのは倫理的にどうか』と正論を言われて特例として十二番棟に入れるしかなかった」
「大問題ねぇ……」
綾子の疲れきった様な言葉に京子は初っぱなからつまづいた計画を修正するためにこれからも苦労するであろう友人に同情をする。
「でも……ちょっと嬉しそうね？」
「まあ……な。計画に関わっている人間としては音宮がした事は不味

いと思ったが……刹那の願いを知っている身としては『良くやった！』と手放しで誉めたい気持ちがある」
「私もよ」
二人はそんな言葉に笑い合う。何も知らない少年少女を一人の英雄の為の踏み台にする計画利用していることに少なからず罪悪感を抱いている人間達にとっては、響のした事は少しばかり胸が空く思いであった……

ーーーーーーーー

『ほお……そんな事になったのか』
「はい。機械仕掛けの英雄は初っぱなのかませ犬の誕生からイレギュラーが起きてつまづいた上に……フィーネの誘導で雇い入れた寮母さんのファインプレーで天道寺英人を英雄に導く為のオナホ（マンセーヒロイン）しかいない寮じゃなくて、多祥なりとも彼と関わりのある連中のいる寮に住む事になりました」
同時刻、モニターの光しかない部屋で若い研究員風の青年が誰かと話をしていた。
『それにしても……暗かったあの少女がそんな元気な少女になっていたとはね……』
「ええ。孤児院に行くまでは刹那さんが物凄く心配してましたたからね……」
青年が思い出すのは音楽プレーヤーを暗い表情で聴く幼い響とそれを共に聴きながら響を励ます刹那の姿だった。
『そう言えば、ピラーとの対話の為の装備の開発の状況はどうだい？』
「ダメですね。試作機から全然発展が出来ません……やっぱりコンバーターを1から作った貴方は偉大ですね」
『フィーネやシェム・ハの手助けもあったとはいえ、特高の中に秘密の部屋を作って研究をしている君も大概だと思うがね』
話をしている人物の発言に青年も苦笑いをする。
「通信を気取られない為にもそろそろ切りますね」
『わかった。君も気を付けたまえ』
「博士こそ」

青年は話していた人物にそう言って通信を切ると、そのまま部屋の真ん中にある装置に向き直る。
「ピラーとの対話の為の装置……これが出来れば、きっと……！」
青年が思い出すのは、人里離れた場所で見付けた小型のピラーの側で出会ったフィーネやシェム・ハから話を聞いて出した結論を大半の人間が笑い飛ばしたり、頭の病気を心配したりする中で「素敵な話ですね！」と微笑んでくれた少女の姿。
「必ず成果を出してみせる。刹那さんの弟に長野ピラーにいる人々を殺戮させない為に……！」
青年はそう言いながら、装置の調整を再開した……

第7話　学生寮と日課

保健室から退出した響はそのまま校舎を出る。
夕日が赤く染めるグラウンドでは、光の刃と砲撃によって刻まれた巨大なクレーターを、数台のブルドーザーが埋めていた。
響はそれを横目に見ながら、校舎から少し離れた場所に建てられた、十二棟も並ぶ四階建ての建物に向かう。
これから三年間、彼女が暮らす事になるエース隊員の寮である。
「わ～……凄いなぁ。部屋も広いんだろうな……」
響は寮の大きさに感動をしながら自身の寮である十二番棟に足を向けた。
「音宮さん、起きたのか！」
「あ、天道寺君！」
寮の中に入った途端に響は走りよってきた英人に声をかけられた。
「天道寺君も同じ寮だったんだ！」
「天道寺だけやなくて、わいや兄弟も一緒やで」
響がそう言うと映助と宗次も歩み寄ってきた。
「天道寺君……ちょっと言いたかったんだけど、なんで皆がいるのにあんな事をしたの？　空知君が避けたりしたら、私や音姫ちゃん、遠藤君に色んな人が巻き込まれたかもしれないんだよ？」
「う……それは、『神凪（かんなぎ）』さんにも同じことを言われた……」
「神凪さん？」
響が英人にエクスカリバーを人が密集している所に向けて放ったことを注意すると、英人はバツの悪そうに顔をそらしながら呟いた名前に響は首を傾げる。
「私だ」
「わひゃらば!?」
後ろからの声に響が悲鳴をあげながら後ろを見ると、そこには『特徴のないのが特徴』を体現したような少女がたっていた。
「あ、貴方は……？」
「私の名前は『神凪零（れい）』だ。よろしく頼む」

「う、うん……よろしく」
　手を差し出してきた零に響はその手を握って握手をしながらもう片方の手をドキドキする胸に当てて落ち着かせる、
「まあ、そんなことよりもこっちの方が重要やで」
　映助はそう話を切り替え、横を指さす。
　玄関の横は広い談話室となっており、寮生の大部分が集まって、これから共に暮らす仲間達と親睦を深めていた。
「わあ～……私達もこれからの為にも加わらないとね！」
「そうだな」
「ああ」
　響はその光景に目を輝かせながら英人と零にそう言い、英人と零はそんな響に苦笑いをしながらもそれに同意する。
「ああ。仲良くしないとな」
「あぁ、仲良うしたい子が沢山おるわ」
　宗次が見ていたのは携帯ゲーム機で遊んでいる男子達だったが、映助が見ていたのは談笑する女子達であった。
「ほれ、あのセミロングの子とか、音姫ちゃんには及ばんでも、なかなかイケてるやろ？　隣の黒髪ロングも根暗っぽいけど爆乳やし、向かいの小柄なロリ体型もマニアックでええわ～」
「はぁ……」
「遠藤君……」
「おいおい……」
「……」
　映助の言葉に宗次は溜め息を吐き、響はひきつった顔で映助を見つめ、英人は呆れ顔になり、零に至っては絶対零度の目で映助を睨み付けていた。
「そもそも、どうして女子がここに居るんだ？」
「自分、そっちの気があったんかっ!?」
「あ、そう言えば……なんで男女が同じ寮に住むんだろ？」
「そう言えば俺は危うく女子寮に入れられそうだったんだよな……」
　宗次の純粋に疑問に思うような言葉に映助は尻を隠し、響はそう

言って首を傾げ、英人は自身がこの寮に来ることになった理由を思い出していた。
「男子と女子が同じ寮に部屋割りされているんだろ、それは問題があるんじゃないか？」
「だよねぇ……」
　普通なら男女別々の寮にするものだ。建物の数が足りているならなおさらである。
「言われてみればそうやな」
　女子がいる喜びで舞い上がっていた映助も、今更ながら異常に気付く。
「せやけど、これはチャンスやん！　風呂を覗いたり、夜中に押しかけたり、げへへへっ」
「……」
「やったら玉を蹴り潰すわよ」
「何や、怖い事を言わんとお前も――うげっ！」
　映助の発言に響と零が無言で映助の近くから離れる中で後ろからの声に映助は振り返り、そして固まった。
　そこに青筋を浮かべて立っていたのは、彼が先程まで注目していた、セミロングの美少女だったからだ。
「何かしら、性犯罪者さん？」
「ま、待って、これは違うねん……」
「そうだ、君は誤解している」
「待ってくれ」
「兄弟、天道寺！　助けてくれるんかっ!?」
「まだ実行していないから性犯罪者予備軍だ」
「そうだ！　実行をしていないなら、まだ予備軍だ！　……すぐに予備軍外れそうだけどな」
「ぶふ!?」
「このどアホ共っ！」
　宗次と英人の少女への援護射撃を背中に浴びせられ、映助は渾身の裏拳ツッコミを放つ。

だが、英人は裏拳を回避し、宗次は裏拳を容易く受け止め、そのままアームロックに移行した。
「ノーッ！　ギブ、ストップや兄弟っ！」
「このように、反省しているから許してやってくれ」
「いや、これは反省って言えるのか!?」
「……ぷっ、あははっ！」
三人の流れるような漫才に、少女も怒りが吹き飛び爆笑した。
「おかしな奴らね。いいわ、さっきのは聞かなかった事にしておく」
「ありがとう、えーと……」
「『平坂陽向（ひらさかひなた）』よ、漫才師さん」
「空知宗次だ」
「私は音宮響だよ」
「天道寺英人だ」
「神凪零だ」
少女こと陽向は笑顔で右手を差し出し、響達も順にそれを握り返す。

「ワテは遠藤映助や、よろしくな陽向ちゃん！」
「聞いてないわよ」
「聞かれてないぞ？」
「聞いてないって」
「聞かれてないけど……？」
「お前の名は聞いてないぞ」
「皆して冷たすぎやろっ！」
映助は泣いて逃げ去るが、響達は特に追いかけたりもしない。
「しかし、本当に男女が一緒の寮なのか？」
「そのとおりよ。特例の天道寺君を除いて男女の区別なくクラスごとに分けられているわ」
響達が声に振り向くと、そこには眼鏡をかけた平凡な容姿の女性教諭がいた。
「貴方は？」

「ここの寮監で君達のクラスの副担任も務めている『桜ノ宮了子（さくらのみやりょうこ）』よ。因みに、エースとしてクラス単位で行動することもあるから出来る限り交流はしておいてね。でも……」
了子はそう言いながら響達に微笑み……
「クラスを超えて男子同士や女子同士の友情を育むもよし、男女を超えて友情を育むもよし、勿論甘酸っぱい恋愛や咲き乱れる同性愛もよし。一度しかない高校の青春なんだから、楽しみなさいな♪」
了子はそう言って響達の視線を談話室へと向けさせる。
「さあ、そろそろ寮での食事を担当する寮母さんが食事を持ってくるわよ？　食べて、交流をしなさい」
「はい！」
響がそう言っていの一番に談話室へ入ると、宗次達もそれに続いて入っていき……
「……」
「……」
零と了子はそんな響達を見ながら意味深に頷きあった……

――――――――――――
「あ～……美味しかった」
部屋へと入った響はベッドに横たわりながらそう呟く。
寮母の作った料理はどれも美味しく、お腹いっぱいになるまで響は大量に食べていた。（そしてそれにクラスメイトはとても驚いていた）
「おっと、日課日課」
響はそう言って持ってきたバッグに向かうと数台の色分けされた音楽プレーヤーを取り出す。
「今日は……これの気分かな？」
響は黄色の音楽プレーヤーにイヤホンを着けると、それを耳に入れて音楽プレーヤーを起動させる。
「～～～♪」
響はそこから流れる音楽を楽しげに聴きながら、自身と一緒に音楽

を聴いていた自身を救ってくれた女性と己の友人を思い出す。
（刹那さん、見ててください。天道寺君と一緒に英雄になってみます。月夜（つくよ）ちゃん、私は特高まで来たよ。月夜ちゃんが幸せに過ごせる世界にする為に頑張るよ）
響はそう思いながら音楽を聴きながら目を閉じるのだった。
「……響、どうして来たの？」
そんな事を一人の少女が呟いた事を響はまだ知らなかった……

第８話　教室格差

六畳間の一人部屋という、学生寮としてはかなりの好待遇にまた驚きつつ、夜が明けて次の日。
寮母から出された朝食を平らげ、校舎に向かい途中で英人と別れた響達は、これから一年間お世話になる自分達の教室に到着し、驚愕する事となった。
「な、なんやこりゃぁぁぁ――――っ！」
映助が絶叫したのも無理はない。
英人を除いた十二号棟の面々が案内された一年Ｄ組の教室は、そこだけ百年前の大正時代に逆戻りしていたからだ。
全木製の二人掛けの机と椅子、むしろ新鮮に感じる本当真っ黒い黒板。
当然のようにクーラーはなく、暖房器具もヤカンの乗った石油ストーブだけと徹底している。
「ノスタルジックね……」
「ほ、本当にここで勉強するんですか……？」
陽向や他の生徒達も困惑し、教室の入口で立ち尽くしていた。
そんな中、宗次と響は驚いた様子もなく窓際の一番後ろとそのすぐ前の席に座るのだった。
「兄弟、何しれっと座っとんねん！」
「響もなんで座ってるのよ!?」
「悪い、窓際が良かったか？」
「ごめん、みんなで決めた方が良かった？」
「違うわ！　この教室に何も思わんのかいっ！」
「そうよ！　酷すぎでしょ！」
「そうだな……村の学校より立派だ」
「空知君って、どんな所に住んでたの……？」
「ツッコミをいれる所はそこじゃないでしょ!?」
「自分、本当に日本育ちかっ!?」
伝説の秘境・グンマーでもあるまいし、とツッコンだ後で、映助は

ここが群馬である事を思い出す。
「いやいや、おかしいやろ!? ここって築三年くらいの新校舎やんか、何で教室だけタイムスリップしてねん!」
何かの見間違いかと、映助はD組から飛び出し、隣のC組を覗いて再び固まった。
「なん、やと……っ!?」
「わー、中学校みたい」
そこに広がっていたのは、中学校の頃に見たのと同じ、パイプの椅子や机が並ぶ普通の教室。
「う、嘘やろ……」
「大学ってこういう風なのかな?」
続けて覗いたB組は、後ろの席でも黒板が見やすいよう軽く傾斜した床に、高級そうな長机が並んだ大学のような光景だった。
「ありえん……」
「凄い、バカテスみたい……」
フラつきながら辿り着いたA組の中を見て、映助はついに力尽き、響も昔読んだラノベの様だと呟いた。
人体工学に沿って設計された、最高の使い心地をもたらす椅子と机。
一人に一台ずつ配られた、教科書とノートを兼ね備えた最新型のタブレットPC。
教室の後ろにはドリンクバーと軽食コーナーまで置かれ、勉強で疲れて小腹が空いた時も安心。
黒板は液晶ディスプレイになっており、チョークや黒板消しなんて無粋な物は消え、動画で分かりやすく授業内容を教えてくれる。
それは最新の技術を惜しげもなくつぎ込んだ、二十一世紀に相応しい教室であった。
……英人は女子生徒だらけなのとそんな教室の豪華さに肩身が狭そうだったが。
「ふざけんな、海に沈めんぞコラっ!」
「落ち着け、群馬に海はない」

「言動がヤクザみたいだよ!?」
宗次のボケや響の言葉にツッコミ返す余裕もなくし、暴れだす映助に向かって、鋭い声が飛んでくる。
「静かに！　廊下で騒ぐな」
思わず背筋が伸びてしまう、迫力に満ちた声の主は、長い黒髪を後ろでまとめ、三角形の眼鏡を光らせた、ＴＨＥ女教師という格好の美女。
「貴方は？」
「一年Ａ組の担任、色鐘綾子」
「いや、何処から出してんですか!?」
女教師こと綾子はそう名乗ると、大きな胸の谷間から取り出した教鞭で、ビシッと壁を叩く。
「分かったら自分達の教室に戻れ」
「待てい、教師ならこの差別を何とかせいやっ！」
「あ、色鐘先生って美人なのに誤魔化されなかった」
響の言う通りに珍しく美女の色香に騙されず、映助はＡ組とＤ組の教室を交互に指さして怒鳴る。
しかし、綾子はそれに冷たい視線を返すだけだった。
「差別？　これは区別だ。貴様ら落ちこぼれクラスに相応しい教室だろ？」
「ワテらが、落ちこぼれやと……っ!?」
「落ちこぼれ……か。白々しい」
忌々しげに呟いた零の言葉は誰にも気付かれずに宙に消え、綾子の言葉にショックを受けて崩れ落ちそうになった映助を、宗次は背後から支えてやりつつ、物怖じせずキツい女教師に問いかける。
「すみません、どのような基準でクラス分けされたのでしょうか？」
「ほう、貴様は目上への態度を分かっているらしい。よかろう、教えてやる」
「うわぁ……軍人っぽい」
今時の教師とは思えぬ横柄な態度ながら、綾子は快諾して説明を始める。

「貴様らが幻想兵器の起動テストを行ったさい、その名称と能力も調査したのは覚えているな」
「はい」
「そのデータから判断し、対ＣＥ戦で優秀な成果を出すと思われた者から順番に、優れた環境のクラスへと振り分けたのだ」
「つまり、俺達は弱いから良い教室を使う資格がないのですね？」
「良く分かっているじゃないか」
　淡々と確認する宗次に、綾子はニヤリと笑みを見せる。
　それが我慢ならず、映助は猛然と反発した。
「あんなテストごときで、勝手に弱いとか決めつけんなや！」
「ライオンに強い棍棒（笑）」
「ぐは……っ！」
「遠藤君！」
　残酷な事実で胸を抉られ、映助は吐血して倒れそうになるが響が慌ててそれを支えた。
「待って下さい、そこのエロ助はともかく、私達まで落ちこぼれなんて納得いきません！」
「そうです、エロ助は当然だけど」
「役立たずはこのエロ助だけだぞ！」
「みんな酷くない!?　抗議に見せ掛けた追い打ちだよそれじゃあ！」
　陽向に続いて他の生徒達も、揃って抗議という名の追い打ちを叫ぶ。
「何でや……ヘラクレスの武器やで……棍棒は使いやすい最強の武器やで……？」
「……（ぽん）」
　床に泣き崩れる友の肩を、宗次は無言で叩く事しかできなかった。
「異論は認めん、貴様らの幻想兵器が弱いのだから仕方あるまい」
「けど――」
　さらに反論しようとする陽向を、綾子は教鞭で壁を叩き黙らせる。
「ならば、天道寺英人の聖剣を超える自信のある者は、Ａ組に入るがいい」

「あの……じゃあ、音宮さんはどうなんですか？」
綾子の言葉にそう言ったのは英人であった。
「天道寺君……」
「音宮さんは俺が放ったエクスカリバーの一撃を受け止めた上にそれを粉砕してみせました。どうして彼女はD組なんですか？」
校舎すらも破壊しそうな光の斬撃を腕で受け止め、槍から放たれた砲撃で粉砕してみせた響の姿を思い出しながら言った英人の言葉に綾子は少しばかり考えた後、口を開いた。
「それは音宮響の幻想兵器が只の一撃で消えたからだ。息の続かない者など戦場では邪魔なだけだ」
「やっぱり……そうですよね。お騒がせしました」
響はその言葉に頷いた後で綾子に頭を下げて踵を返してD組へと戻っていく。
「よく分かりました、お騒がせしてすみません」
宗次もそう言って頭を下げると、まだ落ち込んでいる映助を引きずって、D組の教室に引き返していく。
「みんな、戻ろう」
「くっ……！」
陽向が促すと、クラスメート達も歯ぎしりしつつ帰っていった。
その背中が教室の中に消えてから、綾子は小さな声で呟く。
「……すまない」
「？」
その顔からは、横暴な女教師の仮面が剥がれ、悲しさと哀れみ、同情が入り雑じった様な微笑が浮かんでいた。
……英人は綾子がその顔をする理由がわからずに首を傾げていた。

第9話　汝らはD組

「何なのよ、あの眼鏡女っ！」
（怒りが凄まじいな。……そして既にこのクラスの女子達リーダー格になりつつあるな）
バンッと机に八つ当たりしたのは、零の言う通り早くも女子のリーダー的な存在となった陽向。
先程は皆を鎮めるため、大人ぶった態度で退いてみせたが、本当は悔しくて堪らなかったのだ。
「陽向ちゃん、でも仕方ないですよ～」
小学生かと見紛うほど小柄な、『小向井心々杏（こむかいここあ）』がそう言い。
「そ、そうだよ、私なんてただの盾だし、A組なんて……」
「いや、盾も重要な役割があるんだがな……」
恥ずかしがりやなのか、長い前髪で目を隠しているが、胸は隠しようもなく主張している『鴉崎神奈（からすざきかんな）』が諦めたように呟く。
しかし、陽向はまだ納得いかないと、一人唸るのであった。
「でも、勝手に決まった武器の優劣で、あそこまで見下されるなんて許せないじゃない！」
教室の設備がボロいのは我慢できる。
だが、まだCEと戦ってさえいないのに、落ちこぼれ扱いされるなんて理不尽ではないか。
そう叫ぶ陽向を、爽やか優等生といった感じの『弓月優太（ゆづきゆうた）』が止める。
「よすんだ、一番悔しいのは彼らだろ」
優太が視線で指したのは、窓際の席で我関せずと教科書を開いている宗次と響。
宗次は模擬戦で英人を圧倒し、響はその後のエクスカリバーによる一撃を破壊したにも関わらずD組に押し込められた不遇の槍使い達。
「……そうね、もう言わない」
「当事者達が納得してるのに外野がとやかく言えんしな……」
彼らが黙って堪えているのに、自分達に騒ぐ権利はないと、陽向も

矛を収めるのであった。
　もっとも、当の宗次と響は教室や扱いの差など、これっぽっちも気にしてはいなかったのだが。
「しかし、綾子先生もキツイけどエエ女やったな～、ピンヒールで踏まれたいわ～」
「変態だな」
「うわぁ……」
　響の隣の席で懲りずに戯言を吐く映助を、響はドン引きし、宗次は適当にあしらっていたのだが、ふと誰かが宗次の横に立ったのを感じ顔を上げた。
「こ、こんにちは」
　緊張した様子で挨拶してきたのは、小柄で線の細い美少年が立っていた。
　ズボンを履いていなければ、女子にしか見えなかったであろう。
「こんにちは」
「隣の席、使ってもいいですか？」
「どうぞ」
　まだクラスで席を決めたわけでもなく、好き勝手に座っていただけなので、宗次は何も遠慮する事はないと勧める。
　すると、美少年は嬉しそうにハニカミながら宗次の隣に座った。
「僕、『斑鳩一樹（いかるがいつき）』って言います」
「空知宗次だ」
「私は音宮響だよ。宜しくね、斑鳩君」
「はい、よろしくお願いします」
　ぶっきらぼうな宗次と興味深そうな響の挨拶にも、美少年こと一樹は笑みを絶やさない。
　それをジーッと見ていた映助は、神妙な顔で切り出した。
「なあ、一つ聞いてええか？」
「はい、何でしょう」
「自分、本当は女やろ」
「……はい？」

一瞬、何を言われたのか分からず固まる一樹。
その細い肩を、映助は荒々しく掴む。
「女なんやろ!?　サラシで隠しとるけど実はボインちゃんで……「一樹は生物学上、立派な男だよ！　この変態野郎が！」ぎゃー!?　目が、目がぁぁぁぁぁぁ!?」
「凄く漫画的な目潰しだー!?」
鼻息を荒くした映助がそう言おうとするとその目に向けて指が目にめり込むというギャグ漫画の様な目潰しが叩き込まれ、映助は激痛にのたうち回るはめになった。
椅子から転げ落ちて激痛にのたうち回る映助を、憐れに思う者はクラスに一人もいなかった。
そこにいたのは髪を背中で乱暴に括った、中性的な容姿の美少女だった。
……スカートを履いていなければヤンキーの様な雰囲気や言葉遣いから男子にしか見えなかったが。
「き、君は……？」
「俺は『須藤誠（すどうまこと）』。一樹とは幼馴染みだよ」
「ま、誠ちゃん……やりすぎだよ」
「やりすぎなんて事はねぇよ。つか、骨格でわかれっつうの」
「ああ、一樹の骨格は男だな」
「わぁ、分かってくれるんですか！」
「ふーん……昨日も思ったけど、お前も武術をやってる口か？」
武術家特有の観察眼で見抜いた宗次に一樹は感動して目を輝かせ、誠はそんな宗次に感心する。
「槍をじいちゃんから習ってた」
「そうなんですか？　僕、何故か今みたいに女の子に間違われる事が多くて、誠ちゃんに守られる事が多くて困っているんです」
「……え、何故か？」
「……」
いや、誰がどう見ても美少女に間違えるだろう――と、映助や響を含むクラスの大半は心の中でツッコム。

「それで、宗次さんみたいに男らしくなりたいなって、えへへっ」
「……」
照れてはにかむ一樹を、宗次は暫し黙って観察する。
そして、肩を優しく叩いて告げた。
「諦めろ」
「まあ、予想はしてた。……うちの道場で鍛えても全くダメだったからな」
「えええ――――っ!?」
「そうや、諦めて一樹たんはワテの嫁に――」
「お前は黙ってろ、変態！」
「ぶへえ!?」
宗次が涙ぐむ一樹を慰め、まだ錯乱している映助の頭に誠の回し蹴りが打ち込まれる。
そんな無駄話をしていると、スピーカーからチャイムが鳴り響き、見計らったように教室の扉が開いた。
入って来たのは、ジャージがはち切れんほどの筋肉をまとった、角刈りの大男と寮であった眼鏡の女性。
「私が諸君らの担任、『大河原大馬（おおがわらおおま）』だ」
「昨日も言ったと思うけど、副担人の桜ノ宮了子よ」
「なんでやねえええ――――んっ！」
無難な自己紹介に全力でツッコンだのは、言うまでもなく映助である。
「A組はムチムチの女王様系女教師なのに、何でワテらはむさ苦しいオッサンやねんっ！　リコールや、せめて担任が了子先生なら我慢するわ！」
男子ならば思わず心の中で頷いてしまう、熱い魂の叫び。
それに、大馬は黙って映助の元まで歩みより――
「ふんっ！（ゴキッ）」
「あべしっ！」
「北斗のモヒカンかな？」
スリーパーホールドであっさり絞め落とした。

その断末魔に響は世紀末救世主に殴り倒される悪党の断末魔を思い出す。
「……」
唖然と固まる生徒達に、大馬は低いがよく通る声で告げる。
「諸君、勘違いしてもらっては困るが、ここは普通の学校ではない、CEからこの国を守り抜く戦士を育てる養成所だ。あまり馬鹿をすると体罰も辞さないので覚悟しておくように」
「……はい」
「と言っても基本的には優しくて頼りがいのある先生だから、悩みがあったら遠慮なく言ってね？」
鍛え上げられた兵士の鋭い瞳で睨まれては、ただ頷く以外に選択肢はなかった。
そして、そんな生徒達に苦笑いをしながら了子が補足の説明をする。
教室が静まり返るなか、宗次は床に倒れた映助を起こし、両肩を掴みながら膝で背中を押すという、時代劇でよく見る方法で目覚めさせる。
「げほっ……はっ、金髪のお姉ちゃんはどこや!?」
「ええ……？」
「もう一回寝るか？」
幸せな夢を見ていたらしい映助の首に、大馬の太い腕が再び巻き付く。
「ひぃ！　堪忍やゴリラ先生！」
「それ、逆効果じゃないかな!?」
「それが謝る態度かっ！（ギリギリッ）」
「ぐえええええ――――っ！」
響の忠告も虚しく、大馬によって気絶しないがとても苦しい絶妙な加減で首を絞められ、潰れた蛙のような映助の悲鳴が鳴り響く。
「元気だな」
「いや、これは元気って言うか……」
「ただのアホだな」

宗次や響を除いたクラスメイトの全員が揃って思ったことを零が代弁した。
「さて、時間を無駄にしたが、早速授業を始めよう」
「遠藤君、しっかり！　死ぬにはまだ早いよ!?」
白目を剥き、口から魂を吐いている映助は放っておき、大馬は教壇に立って皆を見回す。
「まずは入学おめでとう、諸君はこれからエース隊員として訓練を積み、ＣＥからこの日本を守る任務に就く。当然だが危険な任務だ、命を落とす危険性もある」
ゴクリッと誰かが唾を飲み込む音が、妙に大きく教室に響いた。
「正確に言えば死ぬわけではないが、死ぬよりも辛い状態になるだろう」
大馬はそう言いながら、教壇の下からノートパソコンとプロジェクターを取り出す。
暫し無言で操作した後、黒板に映し出されたのは、ベッドに横たわる痩せ細った患者の姿。
「ＣＥの攻撃を受けた者は、意識不明の昏睡状態に陥り目覚めなくなる。今のところ治療方法は見つかっていない」
（かつての幻晶の民の攻撃を受けた者と同じか）
（かつてはせめてもの情けとして殺されていたが……この辺りは時代か）
生気を失った瞳でただ天井を眺め、腹に穴を開けて管を通し、胃に直接栄養を送り込まれながら、排泄の世話をして貰う存在。
それは果たして、人間として生きていると呼べるのか。
自分がそうなった姿を想像し、生徒達の顔は一斉に青ざめる。
「ＣＥの攻撃はレーザー兵器のような光線で、速くて避けるのは難しい。ただレーザーと違って射程は三十ｍ前後と、拳銃と大差ないのが救いだ」
続いて映し出されたのは戦場の光景。
非現実的な六角形の結晶体が、中心の赤い球体から光を放ち、それを浴びた市民が耳を覆いたくなる絶叫を上げて倒れこむ。

「これはピラーが出現した長野県松本市で、当時そこで撮影していたテレビカメラマンが、衛星通信で局に送ってきた貴重な映像だ」
「あの、その人は……」
「死んだろうな、幸運な事に」
「……」
大馬の重い答えに、質問した生徒は余計な事を聞いてしまったと俯いた。
ＣＥの攻撃を受けても、意識不明になるだけで直接命には関わらない。
だが、自ら動く事ができなくなった人間が、救助されず野晒しのまま放置されて、いったい何日生きられるだろうか。
「ピラーを中心に撮った衛星写真も有るが……見ない方がいい」
「見たいって言うなら、放課後に職員室に来なさい。……興味本位で来て職員室で吐いた人もいたわね」
見るか？　――と聞く事すらはばかられる、地獄がそこには映っているのだろう。
地面に打ち捨てられ白骨化した何十万もの死体と、その周囲を漂う場違いなほど綺麗な結晶体の群れ。
「お父さん、お母さん……うぶ!?」
両親の末路を想像してしまった響が口を押さえて洗面所に走ったが、大馬も他の生徒も彼女を責めなかった。
「ＣＥの攻撃は貫通性が高く、防弾ジャケットやライオットシールドの類では防げないが、戦車の装甲や分厚いコンクリート壁なら防げるようだ。アサルトライフル以上、アンチ・マテリアルライフル以下の貫通力と覚えておくといい」
「大馬君、それは銃器について詳しい人間にしかわからないわよ？」
「おっと、すまなかった。とにかく人間の装備では防げないと思ってくれ」
了子があきれ気味にツッコムと大馬は苦笑しながら訂正した。
「ただし、諸君らが身にまとう『幻子装甲』は別だ。これならばＣＥの攻撃も十数発は耐えられる」

それを聞き、重い空気に潰れそうだった生徒達から、ほっと安堵の溜息が漏れる。
「散々脅したが、諸君らエース隊員が倒れる事はまずないだろう。今は生徒の数も増えて、余裕のある戦いが出来ているからな。実際、昨年は一人も犠牲者が出ていない」
市民や自衛隊員の被害も、ＣＥの情報が無かった最初期こそ甚大なものであったが、行動パターンや対処方法が確立された今では、ほとんどゼロに抑えられていた。
「しかし、戦場に絶対は無い。昨日までが安全でも、明日も安全な保障は無い。命の危険がある事を忘れず、常に気を引き締めて任務に当たって欲しい」
「特に実戦では新人程危ない人間はいないわ。常に気を張り摘めろ……とは言わないけど、油断だけはしないで」
そう告げて、大馬は無骨な笑みを浮かべた。
Ｄ組の生徒達も、その笑みを見て安心する。
彼は厳しい教師だが、了子の言う通り自分達の身を案じてくれる優しい先生でもあるのだと。
「では、ＣＥに負けない体力を作るため、今からグラウンドを五十周だっ！」
「やっぱりそうなるのね……」
そして、見た目通りの体育会系で、鬼コーチなのだと知った。
……了子の苦笑いからこれが日常茶飯事なのだとも理解した。
「「えええええ――――っ!?」」
「文句を言う暇があったら、さっさとジャージに着替えろ。遅れた者は十周追加だ」
急げと手を叩かれ、生徒達は慌てて立ち上がった。
「ジャージ、持ってきておいて良かった～！」
響はジャージを忘れたために慌てて走る女子達を見ながら、着替える為に女子用の更衣室へと走り出すのであった。

第１０話　いざ行け授業

「俺達陽気なエース隊♪」
「「俺達陽気なエース隊♪」」
「……」
「どうした、音宮と須藤以外も声を出せ！」
「「「俺達陽気なエース隊！」」」
「よし、朝から晩まで走り抜く♪」
「「朝から晩まで走り抜く♪」」
「「「朝から晩まで走り抜く！」」」

映画でおなじみの行進ソングのメロディーに乗せて、グラウンドを軽快に走る大馬の後を、ノリノリで歌う響と誠以外のＤ組の生徒達はやけくそ気味に叫びながら追いかける。

中学の時に運動部だった面々は、どうにか大馬の速度についていけたが、文系のクラスメート達は見る間に脱落していった。

「もう、ダメ……」
「し、死んじゃう……」
「一樹、大丈夫か？」

見るからに体力のない一樹や、胸が重くて辛そうな神奈などが次々と倒れ、グラウンドは死屍累々と化していく。

「諸君、別に休んでも構わんが、五十周を終えない限り教室にも寮にも帰さんぞ。深夜になろうと先生が付き合ってやるからな」
「先生、凄い体力ですね！」
「まあな！」
「……っ!?」

大馬の非情な宣告に、倒れた者達は悲鳴を上げる体力も惜しいと、ただ立ち上がってのろのろと歩き出す。

「お、鬼やこのゴリラ……」
「すぐ前にいるのに悪口を言うとは……度胸があるな」

テニス部（女子にモテたくて入った）で余裕のあった映助の呟きは、零の言う通りに当然ながら鬼教師の耳に届く。

「余裕だな、お前だけあと十周追加だ」
「ひょっ!?　堪忍やでネアンデルタール先生！」
「余計に悪化するだけだぞ？」
「よし、さらにおまけで三十周だ」
「ほんげーっ！」
「やはりな」
　奇声を上げる映助を見て、Ｄ組の生徒達は思った。
　こいつ、ドＭか？　――と。
　そんな一幕を挟みつつ、運動部だった生徒達はどうにかノルマをこなしていく。
「ラスト一周、ダッシュだ！」
「「ひぃ～っ！」」
「ねえ、須藤さん。ちょっと相談なんだけど……」
「あん？」
　悲鳴を上げ、痛む足に鞭を打ち、どうにか最後の一周を走り切る。
「よくやった、しっかり水分を取っておけよ」
　大馬は完走した生徒達を労い、余裕の足取りで水汲み場からヤカン持ってくる。
「どんな体力してるのよ……」
「化け物ですね～……」
「流石は現役の軍人……なん、ですかね……？」
　陽向と心々杏、『海野遥（うんのはるか）』は溜息を吐き、もう一歩も動きたくないと座り込む。
「化け物と言えば、彼もよ」
　陽向が呆れ顔で見詰めたのは、周回遅れ組を追い越していく二人。
　息を切らせながらも律儀に追加の三十周をしている映助と、まだ余裕の顔で友につき合う宗次である。
「自分、何でそんな、平気やねん……？」
「慣れてるからな」
　家の畑を手伝うか、祖父と槍の修行をするか、近所の子に付き合って山で遊ぶか。

学校で勉強をしている時以外、体を動かしてばかりだった宗次にとって、この程度はまだ準備運動の範囲であった。
「しかし、随分と優しい訓練だな」
「……自分、正気か？」
映助は冗談をぬかすなと顔をしかめるが、宗次はいたって真面目である。
「兵士の訓練としては、優しすぎると思うが」
「まぁ、確かにな……」
大馬の課したグラウンド五十周は、体力のない生徒にとっては地獄だが、元運動部の生徒にとっては少しキツイ程度。
血反吐を吐くほどの耐久レースでも、森や沼地のような不整地を走破させられるのでもない。
戦場へ送る兵士を育てる訓練としては、飴玉よりも甘すぎる。
「せやけどな、本当に優しいなんてのは、あんなんを言うん……や？」
疲れを忘れて怒声を上げかけた映助の目が点になる。
校舎の横の茶色い乾いた土ばかりなグラウンドの中で、唯一青々とした芝生が敷き詰められた一角。
そこでは、Ａ組の生徒達……に響と誠、零等のＤ組の生徒達が混じってフットサルをしていた。
……大半のＡ組の生徒は苦々しげな顔で響を見ていたが。
「シュートだ！」
「任せろ……おらあ！」
「ひ……!?」
零からボールをパスされた誠の渾身のシュートが弾丸の如くキーパーをしていたＡ組の少女に迫り……
「危ない！」
「は！」
それを響が足を差し出して弾き、跳ねて響に当たりそうだったボールを英人が上手く受け止めた。
「須藤さん、強く蹴りすぎだよ！」
「わりぃ！　次はもう少し弱く蹴る！」

（ち……まあ、Ａ組の生徒一人を病院送りにしたせいで手札が一枚減るよりは増しか）
　響が誠に対して怒ると、誠は手を合わせてそう謝った。
「なんでＡ組の授業にみんなが参加してるんや!?」
「私がＡ組との『合同授業』って事で、相談に来た音宮さん達に許可を出したのよ」
　映助の疑問にそう答えたのはイタズラに成功した子供の様な顔で佇む了子だった。
「よっしゃ！　すぐにわてらも……」
「君はまだ終わってないでしょ？」
「お前はまだ終わってないぞ」
「もんげぇー!?」
　調子に乗ってランニングを切り上げようとする映助に笑顔で了子と大馬が却下してランニングを再開させる。
「てかそもそもなぁ！」
「そんなに怒ってどうした？」
「よく見てみ、Ａ組の生徒を！」
　必死に走りながら激怒する映助に宗次は訝しみながらもＡ組の姿を改めて眺め、そして理解する。
　英人以外、男子の姿が一人もなかったのだ。
　つまり、他は全員女子の超ハーレム状態。
「ふざけんなごらあぁぁぁ――――っ！　ここはテメエ専用のキャバクラじゃねえんだよぉっ！」
「映助、関西弁！」
「キャラが崩れてる……って、何を言ってるんだろうね、私!?」
「そんなに怒るくらいなら今すぐにでも替わってほしいな！　女の子だらけって想像以上に気を使うんだぞ!?」
　怒りのあまり標準語になる友の姿に、さしもの宗次も冷や汗を浮かべ、響は自分でも何を言いたいのかわからなくなり、英人はそんな映助の咆哮にそう言い返した。
「オーガ先生、あれはどういうこっちゃ！」

「大馬だ、惜しいが違うぞ」
「そんなんどうでもええわっ！　今すぐあのスケコマシの金玉を切り落とさんかいっ！」
「誰がスケコマシだ、誰が！」
　ヤカンを配っていた担任教師にまで、キレた映助は噛みついていく。
　しかし、大場はまったく取り合わない。
「優秀な生徒が女子ばかりだったんだ、A組に集まるのは当然だろう」
「そんな馬鹿げた話があるかいっ！」
「女子の方が幻想兵器の適正は高いんだ、ちゃんとデータもある」
「え、そうなの？」
「……ああ」
「だからって偏りすぎやろがっ！　うちのクラスなんて七割男子やんけっ！」
「俺としてはそっちの方が良かったよ！」
「男子は適正が低いからな、落ちこぼれを集めたら当然そうなる」
「せやけどな、せやけどなぁーっ！」
　映助と大馬のやり取りに響達がそう言う中で映助は血の涙を流さん勢いで、戯れるA組女子を指さし叫ぶ。
「全員美少女とか、確率的におかしいやろっ！」
（そーいえばそうっすね。……何かの陰謀が動いているのは気のせいっすかね？　……調べてみますか♪）
　そう、A組の女子は全員が全員、モデルやアイドルとして出しても恥ずかしくない、絶世の美少女ばかりだったのだ。
　そして、そんな映助の叫びに首を傾げた『神埼昴（かんざきすばる）』は内心でワクワクしながら暇をみて調べる事を誓った。
「あの極上メロン畑に比べたら、うちの女子なんて潰れたジャガイモやんかっ！」
「クラスの女子を殆ど敵に回してるよー!?」
「お前は馬鹿か!?」
「心々杏、左腕を押えて」

「うん、陽向ちゃんは右腕をお願いしますね～」
響と英人の言葉の通り、正直すぎる馬鹿の両腕が、少女達の手でロックされる。
「えっ、何や急に？　まさか愛の告白っ!?」
「顔を見りゃ気付くと思うんだがなぁ……？」
「うん、ちょっとお話しましょうね～？」
どこまでも脳内お花畑な映助に、小柄な心々杏はニコニコと、それはもう黒い笑顔を浮かべ、校舎裏へと引っ張っていく。
気弱な神奈、我関せずな誠、位置的に止めるのは無理だと判断した零や響を除き、他の女子達も無言でそれに続く。
そして、完全に校舎の陰に消えたところで、凄まじい断末魔が鳴り響くのであった。
「……哀れだな」
「自業自得だ」
「本当に馬鹿だな……」
「遠藤君……」
口調や言葉は違えど、全員が映助の冥福を祈って合掌をした。
宗次も友の死に合掌すると、改めて大馬の顔を見上げた。
「先生、今の話はどこまでが本当ですか？」
「うん？　何の事だ？」
映助の悲鳴がうるさくて聞こえなかったと、大馬はごく自然な笑みを浮かべる。
しかし、それが演技である事は、少しぎこちない瞳を見れば明らかであった。
「ほら、走り終わった者は早く教室に戻れ、授業はまだまだ残っているぞ。音宮、お前達も早く戻ってきなさい」
「はい」
「はーい！　音姫ちゃん、天道寺君、Ａ組の皆もまたね！」
「うん、またね」
「二度と来るな……！」
「……ん？」

「須藤、早く行くぞ」
「え？　あ、ああ……」
手を叩いてせかす大馬に、宗次もこれ以上の追及はせず、大人しく従う。
響もまた大馬の言葉に従って手を振りながらＡ組から離れるが……離れ際にＡ組の生徒の一人が憎々しげに呟いた事に誠は眉を潜めたが、零に急かされた事で首を傾げながら走り出した。
そして、宗次に対して彼一人にだけ聞こえるよう、担任教師は小声で言い残した。
「あまり考えるな」
そこに警告の響きはなく、心配して引き留めようとする優しさが込められていた。
「はい」
だから、宗次はまた素直に頷き、校舎裏のボロ雑巾（映助）を引き取りに行くのだった。
（ぬっふっふ……隠すって事は何かしらの秘密があるってことっすね？　調べる楽しみが出来たっすよ♪）
地獄耳で宗次に対する大馬の言葉を聴いた昴は愉快そうな顔でそう考えていた。
後に、彼女と別のクラスに所属している彼女の弟が好奇心で調べた事の真相ともうひとつの要因によってＤ組全員と英人、音姫が特高から離脱する事になるとは彼女はこの時は思いもしなかった……

第11話　昼食と先輩

対ＣＥに関する授業以外にも、高校生らしく数学や理科などもこなし、ようやく迎えた昼休み。

これから朝昼晩、全ての食事を取る場所となる、学生食堂に向かったＤ組一同は、ここでも格差を突きつけられたのであった。

「なんでやねんっ！」

今日、何度目とも分からぬ映助の叫びが、広い食堂にこだまする。

一学年約百五十人、全学年合わせて四百五十人近くが一斉に集まる場所であり、椅子や机で場所を取られているため、広さに反して少し狭苦しい。

だが、そんな食堂の一番奥には、高価な絨毯が敷き詰められ、貴族の屋敷にでもありそうな、広々とした高級テーブルが設置されていた。

さらには、午後の紅茶を楽しめるテラスや、マッサージ機能付きのリクライニングチェアなども完備されている。

言うまでもなく、そこは特高におけるヒエラルキーの頂点、Ａ組だけが使える特別エリアであった。

「食ってる物まで高級やし、何やねんっ！」

映助達に配られたのは、ご飯に味噌汁と漬物、コロッケにサラダ、飲み物は牛乳といった、学校の給食としても自衛隊員の昼飯としても普通の代物。

しかしＡ組の面々が食べているのは、見るからに高そうなフランス料理のフルコース。

未成年なので流石にワインは出ていないが、よく似た高級葡萄ジュースが注がれている。

「いちいち怒るのにも飽きたわ」

「私もです～」

陽向達は騒ぐ気力も無くして、席について食事を始めた。

宗次も友の肩を叩き、座るよう促す。

「他のクラスや先輩達も我慢してる、騒ぐのはよそう」

「うっ、そうやな……」
映助は渋々納得しながら周囲を見回す。
B組とC組、そして二、三年のA組以外の生徒達も、彼らと変わらぬテーブルで、同じ昼飯を食べている。
特別なのはあくまでA組だけなのだ。
「……あれ、響は？」
「ああ、あいつなら寮母から弁当を貰ってたから中庭に行ったぞ」
「ん？　寮母さんから弁当なんて貰えたんか？」
響がいない事に気付いた陽向が周囲を見渡し、誠は響が弁当を持って中庭に行ったことを告げると映助は誠の言ったことに首を傾げる。
「事前に言っていれば寮母さんからお弁当を貰って学内で食べることも出来るんだよ」
「入学早々に説明された筈だが？」
首を傾げる映助の背後から、凛とした声と呆れ果てながらも真っ直ぐな声が響いてくる。
振り返れば、そこには俳優のごときイケメンの、しかし胸は確かに膨らんだ女子と長い髪をポニーテールにし、強い意思を感じさせる瞳を持つ別ベクトルにイケメンな女子（……胸は平坦である）が立っていた。
「隣の席、いいかな？」
「どうぞ」
「隣の席、良いか？」
「別にいいぜ」
女子なら一目で惚れそうな笑みを向けられ、宗次と誠は特に動揺もせず頷き返す。
「……あんた達は？」
「三年の『先山麗華（さきやまれいか）』、君達の先輩だよ」
「同じく三年の『御剱真奈（みつるぎまな）』だ」
ぶっきらぼうな誠の質問にもイケメン女子こと麗華と真奈は笑みを絶やさず答える。
そして、その後で彼らは麗華と真奈の言葉からこの学園の異常性を

認識し始める……

ーーーーーーーーーーーー

「それにしても、天道寺君までお弁当だなんてね……」

「あんな環境と差別みたいな状況で豪華な食事が喉を通るわけないだろ……」

響はＡ組の豪華さから嫌な予感を感じていた英人と共に中庭で弁当を食べていた。

「いっそのこと、Ａ組に対する依怙贔屓をＰＴＡに相談してみるか……？」

「止めといた方がいいぜ？」

「わあ!?」

英人が自身のクラスの事を通報しようかと呟くと、後ろの茂みから声が聴こえたので響と英人が覗くと……そこには、制服を着崩した野性味溢れるイケメン男子が寝っ転がっていた。

「ふあ～あ……良く寝た」

「あ、貴方は？」

先程まで寝ていたらしい男子が欠伸をしていると、響はその男子が何者かをたずねる。

「俺は『風宮大和（かざみやまと）』。クラスは三年のＡ組だ」

「え？　俺の先輩なんですか!?」

「まあな。あ、敬語は禁止な？　俺は敬語が苦手なんだ」

男子……大和の所属が告げられると、英人は驚くが大和はなんのことも無いと告げる。

「えっと、風宮……さんはなんでＰＴＡに相談するのを止めたんですか？」

「本来なら『さん』もいらねえんだけどな……ま、無駄だからだよ」

「無駄かどうかは……」

「俺が施設の差別を訴えようとしたら即座に電話が切れたからな」

「既に実行済みだったんですか!?」

大和の言葉に英人が反論しようとした瞬間に言われた言葉に響は愕然とする。

「ああ。インターネットや電子メールは元より、新聞への投書に家族への手紙、果ては外出時に立ちよった駅の掲示板まで……あらゆる通信手段を使っても無駄だったよ。まあ、何処までがその対策の範囲なのかを確認した結果、特高の秘密……特に『幻想兵器やＡ組に関わるような事』がデッドラインだってことがわかった」
「幻想兵器はまだわかるんですが、何故Ａ組に関する事まで……？」
「知らん。ま、何かしらの軍事機密関連であることだけは確かだ」
　大和が使った連絡手段の数々に英人は呆れながらも思案顔になるが、大和はそれを知らないと一蹴する。
「俺達は神話や伝説の武器を手にしてはいるが、あくまで『兵士』にすぎない。好き勝手にふるまえる『英雄』じゃあない……特高の連中が言いたいのはそう言う事さ」
「それは……」
「違うって言う気か？　おまえ（天道寺）の置かれてる環境を考えてみろ」
「う……」
　英人が大和の発言に反論をしようとすると、大和はそれに対して冷ややかな視線を向けながらそう言う。
　寮は兎も角……美少女に囲まれ、最新鋭の教室を使い、果ては王公貴族の食事とみまごう程の昼食を食べれる……英雄と呼ばれた少女の弟であるが故にその特権を受けられている英人は大和のその視線と言葉を受け止められなかった。
「風宮先輩、それは違います！」
「音宮か……何が違うんだ？　お前なんて……」
「たった一人しか英雄になれない訳じゃありません！　確かに刹那さんが幻想兵器の有用性を示してくれたから、私達は此処にいるし、天道寺君もＡ組にいるかもしれません。でも……先輩達が私達が入学するまで必死に戦ってくれたから、私達が此処にいるのも事実だし、それに感謝している人がいるのも事実なんです！」
「……って？」
「だから、誰だって誰かの英雄になれるんです！　天道寺君だけが、人を救える英雄じゃないし、私達は兵士なんかじゃないんです！」

響は刹那に救いだされ、孤児院に預けられていた自分を引き取った父方の祖父母が両親を失って心を閉ざしていた自分を必死に救い出してくれた事を思い出しながら、英人だけが英雄なのではないのだと大和に説明する。
「……変な奴だな、お前。理不尽に落ちこぼれだって決めつけられたのに」
「いやぁ。一発で幻想兵器が解けたのも事実ですので……でも、落ちこぼれが英雄に這い上がるのって物語でも現実でも良くあるじゃないですか！」
「現実じゃほんの一握りだけどな、それ。……たく、変な感じになっちまったけど、発言や行動には気を付けた方が良いぜ。これは教師達から散々に始末書や説教をくらった先輩からの忠告だぜ」
響の言葉に溜め息を吐いた大和はそう言って手を振りながら去っていった。
「……本当に色々やったんだろうなぁ、風宮先輩」
「ああ……本当に、何故Ａ組に対してだけ歪な程の依怙贔屓をするんだろうな……」
響と英人はそんな疑問に対して言い知れぬ不安を覚えながらも、昼食後の授業に遅れない為に弁当を慌てて食べた後でそれぞれの教室へと去っていった。

ーーーーーーーーーーーーーー

「フィーネ、それにしてもいきなり派手にやったな」
零……シェム・ハはＡ組の授業に響達を合同授業という形で紛れ込ませた事に苦笑いをしながらそう言った。
「これ（校長）を操り人形にしているんだ。有効活用しないと勿体ないだろう？」
「……」
了子……フィーネは自身の側で虚空を見つめている特高の校長を蔑んだ目で見ながらそう言った。
「それはそうだな。とはいえ、怪しまれたら話にならん。目立つ真似は避けろ」

「わかっている。それよりも寮内ではなるだけ天道寺英人に接触してくれ。音宮響のお陰で洗脳が余り進んでいないみたいだが……何処で一気に進むかわかったものじゃないからな」
「ああ。それでは戻るぞ」
フィーネとシェム・ハはそう言うと、そこから了子と零へと戻り、校長室から見つからない様に抜け出した……

第12話　暗器と制御不能

ズガドーンと大きな音が響き渡り、響は校庭の端に植えてあった木をへし折り、その先にあるコンクリートの塀に激突した。
「な、なん…で……!?」
「ひ、響ーーーーーーー!?」
「お、音宮ーーーーーーー!?」
幻子装甲があっても殺せなかった衝撃でフラフラになった響はそう言いながら倒れ伏し、陽向と誠の悲鳴が校庭に響き渡った。
何故こうなったのか……それは少し前に遡る。
ーーーーーーーーーーーーー
昼休みの後、D組は再びジャージ姿でグラウンドに集合していた。
一時間目と違うのは、皆が腕に幻想変換器を着けていること。
「この時間は改めて、幻想兵器を使った軽い打ち合いをしてもらう。昨日は結局、実働試験を行えなかった者が多いからな」
担任の大場がそう言うと、生徒達は嬉しそうに顔を輝かせた。
英人の聖剣騒ぎのせいで、その相手であった宗次と聖剣の一撃を防ぐ為に飛び込んだ響以外、まともに幻想兵器を使っておらず、少々フラストレーションが溜まっていたのだ。
「昨日、保科先生が説明したように、変換器を着けた諸君らの体は、幻子装甲という一種のバリアに覆われており、怪我をする危険はない」
キーワードが必要な幻想兵器と違い、幻子装甲の方は自動で起動するらしく、生徒達の体は既に透明の力場をまとっていた。
「しかし、攻撃を受け続ければ、諸君らの幻子干渉能力が限界に達し、幻子装甲も幻想兵器も消えてしまう、という話も聞いているな」
「本当にゲームのMPみたい」
「だなぁ……まあ、俺は格ゲーメインでRPGは勧められたら触れるって感じだったけどな」
響の呟きに誠は自身の幻想変換器を見つめながらそう言った。
(でも、幻子装甲や幻子ってなんなんだろう？　検査をしていた研究者さんとかの話だと、人の精神によって形を変えエネルギーを生み出

す謎の物質でそれをどれくらい上手く操れるかが『幻子干渉能力』って感じみたいだけど……）
幻子干渉能力が高い、即ち精神が強いほどより幻子を操れ、強力な特殊能力を何度も放て、幾度も攻撃を防げるという事であろう。
ならばこそ、響の脳裏に一つの疑問が浮かぶ。
（精神が強いって、なんだろう？）
絶体絶命のピンチでも、決して諦めずに戦う不屈の勇気。
どんな苦境や拷問にも耐え抜く鋼の根性。
パッと思いつくのはそういった強さだ。
（他に思い付くのは……発想力や想像力、後は空想力……かな？　それを思い付ける精神力がないと考え付けないから……あれ？　だったら……）
響はふと己の手を見つめる。もしも、彼女の考えている通りなのだとしたら……
「幻子装甲が半減すると一度警告のアラームが鳴り、さらに限界寸前になるとアラームが鳴り止まないように設定されいる。しかし、戦いに熱中して音が聞こえず、攻撃を続けてしまったという事もあるだろう」
他にも、悪意を持って攻撃を止めないという可能性もあるが、あえてそこには触れない。
「だから、相手の装甲が半減したら、双方の幻想兵器が自動でロックされるように設定してから試合をしてもらう」
「だろうな……でなけりゃ、怪我人続出だ」
誠の言う通りで、そうする事によって間違っても怪我をしないようにするのだ。
「なので、試合前にはきちんと私に申し出るように。無断で喧嘩紛いの事をした者は……まぁ、覚悟しておくんだな」
「例によって例のごとく……」
「体罰や始末書だろうねぇ……」
罰の内容を明言しない辺りが、逆に恐ろしい。
大馬の脅しに皆身震いしつつ、対戦相手を探し出す。

「つー訳で……」
「兄だ……」
「空知、戦(や)ろうぜ？」
「あら？」
　映助が話し掛ける前に誠が目をキラキラさせながら宗次の肩に手を置いて模擬戦をしようと提案した。
「俺は別に構わんが」
　宗次は突然の事に少し驚きつつ、隣の映助を窺う。
　すると、彼はフッとクールな笑みを浮かべ、ゆっくりと背を向けた。
「兄弟、幸せを祈ってるで」
「はぁ？」
「ワテには一樹たんがおるから、「くたばれこの変質者がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」んぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」
「うわぁ、凄い理想的なライダーキック……」
　映助はそう負け犬の遠吠えを上げて美少年の胸に泣きつかんと走り去ろうとして……その後頭部に向けて誠が放った日本が世界に誇る仮面のヒーロー達の必殺技のごとき飛び蹴りが炸裂し、そのすぐ後で男子達による袋叩きによって悲鳴をあげる羽目になった。
「何だ、あいつは？」
「知るかよ。まあ、変質者は置いといて……とっとと戦おうぜ」
　まぁ映助だしなと、奇行を気にしない宗次の側に戻ってきた誠は頭をバリバリと掻きながら大馬に試合を申請し、二人は距離を取り合う。
「「武装化」」
　幻想変換器から生み出された光が、互いの手に伝説の武器を生み出す。
　宗次は停まったトンボが切れるほど鋭利な槍、蜻蛉切。
　対する誠はコの字を描くように折り畳まれている何かを手に持つと、それを展開して薙刀にした。
「それは……？」
「もしかして……烈火の炎の『鋼金暗器(こうごんあんき)』!?」

「正解。俺の聖典（バイブル）たる作品で一番のお気に入りのこいつが来たと知った時にはマジで喜んだぜ……なんで、いきなり行かせてもらう！」
まさかの漫画作品の武器に驚く響に誠は微笑みながらそう言って薙刀を撫でると、好戦的な笑みを浮かべ……
「おらぁ！」
「！」
そのまま宗次に向かって突きを放つ。それを柄の中央で受け止められると、フェイントを入れつつの左右からの連続切り返しが、雪崩のように襲いかかる。
「らぁぁぁ！」
「っ……！」
それを槍で防がれ、弾かれると誠はバックステップで距離を取る。
宗次はそれに対して突きを放って追撃すると誠は薙刀の柄でそれを払う。すると誠は薙刀の中央を分割し、そこから鎖で繋がれた刃を投擲する。
「鎖鎌か！」
「その通り！」
先程までの直線的な攻撃から一転しての変則的な軌道を描く攻撃に宗次は肩に被弾する。
「自己紹介でも言ってたが……やはり君も武術をやってるのか」
「まあな。つっても、俺の家は凄い雑食でよ……刀や槍、弓みたいなメジャーな武器からバグナウとか寸鉄、後は如意珠なんてマイナーな暗器まで教えてるんだよ。まあ、お陰様で鋼金暗器を自在に扱えるんだけどな」
誠は自身の家の教える武術の節操のなさを思って苦笑いをするも、すぐに気を取り直して鎖鎌を投げ付ける。
「うらぁ！」
「此処だ！」
「やべ……!?」
宗次はわざと蜻蛉切に鎖を巻き付けさせると、即座に反撃に転ずる。

「ぐぅ!?」
宗次から繰り出された瞬きよりも速い突きは、防御の暇も回避の暇も与えず、誠の左肩に突き刺さる。
「くそったれ！」
誠は幻想変換器を操作して鋼金暗器を一度消すと、再び出して反撃をしようとするも、その隙をつかれて鳩尾と右足に突きが突き刺さる。
「大馬先生」
「何だ」
「幻子装甲は当たる箇所によって耐久度が変わったりするんですか？」
「いや、どこに当たろうと変わらん」
響がふと疑問に思った事を大馬に聞くと、そこに気づいた事に感心しつつ、大馬は答えた。
「テレビゲームのＨＰみたいな物だな。頭に当たろうと指に当たろうと、一の攻撃で一ダメージをくらう」
つまり、急所にくらって一撃で落ちるような心配はない反面、かすっただけでも装甲が削られて、直ぐに限界が訪れてしまう。
「全部避けるか、捌けってことかよ……まあ、やれって言うならやるけどな！」
誠はその言葉に呆れながらも面白いとばかりに薙刀形態の鋼金暗器を構え直す。
「響、暇なら私と試合をしない？」
先程まで神奈と試合をしていた陽向が響に対して試合を申し込んできた。
「うん。良いよ」
「そう」
誠と宗次が激戦を繰り広げている中で申し込まれた響は頷いて大馬に許可を貰うと陽向と向かい合わせになる。
「「武装化」」
（来て、グングニル）

幻想変換器から生み出された光が、互いの手に伝説の武器を生み出す。
響はペンダント……ではなく、響が渾身の思いを込めて祈ったためか穂先がオレンジと黒に塗り分けられたグングニルが現れる。
対する陽向が掴んだのは、鞘に収まった一振の刀。
彼女がゆっくりと引き抜くと、身も凍るような冷気と共に、青白い刀身が現れる。
それはまるで氷かドライアイスのごとく、白い氷煙を常に吐き出していた。
「それって、南総里見八犬伝の村雨？」
「へえ、一目で分かるんだ」
自分は説明されないと分からなかったのに凄いなと、陽向は素直に感心する。
「そう、これは南総里見八犬伝の八犬士・犬塚信乃の刀、抜けば玉散る村雨丸――って、全部ネットで調べたんだけどね」
「でも、陽向ちゃんのイメージにはぴったりだね。女剣士って感じで」
「ありがと」
響の言葉に陽向は照れつつも、正眼の構えを取る。
刀身はぶれる事なく、正中線と真っ直ぐ重なり、肩や腕は無駄に力まずリラックスしながらも、両足は一瞬で間合いを詰められるように力が満ちている。
（剣道の経験者かな？　……全力で頑張らないとね！）
「行くよ！」
響は先手必勝とばかりに一歩踏み出し……目の前にコンクリートの壁が出現し……
「……へ？」
ズガドーンと大きな音が響き渡り、響は校庭の端に植えてあった木をへし折り、その先にあるコンクリートの塀に激突した。
「な、なん…で……!?」
「ひ、響ーーーーーー!?」
「お、音宮ーーーーーー!?」

幻子装甲があっても殺せなかった衝撃でフラフラになった響はそう言いながら倒れ伏し、陽向と誠の悲鳴が校庭に響き渡った。
「何故、アイツは『シンフォギア』に必要な『歌』を歌わない？　あれではシンフォギアを十分に使えん」
その光景に遠くから呆れたような声で呟いたのは魔女の様な見た目の幼い少女であった。
彼女は響の幻想兵器の本当の姿を知っており、響が何故壁に激突する事になったのかも理解していた。
「しかし……」
少女はポツリと呟く。
「何故オレは『生きている』……？」
少女は自身が死んだ筈だと自問しながら保健室へと運ばれる響を見ていた……

第13話　風呂と血塗れ

午後の授業をこなし、少し早めの夕飯を食堂で食べると、ようやく特高での一日は終了する。
慣れていてまだ元気の残る二、三年生と違い、新入生達は誰もが疲れ果て、這うように寮へと戻っていく。
特にD組の生徒達は疲労が激しく、半数近くは直ぐ己の部屋に戻り、布団に身を投げていた。
しかし、残り半分はというと、一階の談話室に集まって、真剣な表情で顔を突き合わせていた。
「さて、皆分かっとるな」
映助が代表し、集まった者達の顔を見回す。
この場にいるのは男子のみ。そして女子はというと、浴場で汗を洗い流している最中である。
となれば、何をするかなど自明の理であろう。
「女子風呂を覗く、これがワテらの任務や」
「何て事を言い出すんだっ！」
「そんな事を真面目そうな顔で言うな馬鹿！」
机を叩き怒声を上げたのは、委員長的なリーダー気質の爽やか優等生、優太と他クラスであるもののこの寮で暮らす英人である。
「そんな犯罪行為、許されるわけがないだろう！」
「そうだ！　幾らなんでもヤバイだろ！」
正義の雄叫びを上げる優太と英人に、男子達は白けた眼を向ける。
「覗きは犯罪、そんな事は言われんでも皆分かっとるわ」
「なら――」
「せやけど！　やめろと言われてやめられるなら、この世に警察はいらんのや！　そんな程度で無くなる煩悩なら、この世に子供は生まれんのやっ！」
「なっ……!?」
「く……!?」
謎の説得力を放つ映助に、優太と英人は思わず気おされてしまう。

だが、そこに別の声が加勢してくる。
「あの、やっぱり覗きとか良くないと思います」
そう反対したのは、女子と見紛うばかりの美少年、斑鳩一樹であった。
「そんな白けた事を言えんのは、一樹たんが女やからや」
「女じゃないですし、たんって呼ぶの止めて下さい」
『だから一樹は男……！』
『ストップ！』
『落ち着きましょうね～』
ム～と頬を膨らませるが、それもリスみたいで愛らしく逆効果であった。
「ほら、宗次さんも何か言って下さい」
「……あぁ、そうだな」
「と言うよりも、空知君は何を……!?　みんな、覗きはやめましょう！」
一樹に袖を引っ張られた宗次は、学校から支給されたスマホを慣れない手付きで操作するのに忙しく、気のない返事をするだけであった。
そして、遥は宗次が何をしてるのかを覗き込むと、顔を青ざめさせて即座に男子達に覗きの中止を懇願した。
「海野、急にどうしたんや？」
「いや、須藤さんの名字を聴いてからずっと聞き覚えのある名前だと思って首を捻って考えていたんだけど……思い出した。彼女は、『血塗れ須藤（ブラッディ）』と呼ばれた人です」
「「血塗れ須藤!?」」
『懐かしいあだ名だな』
『本当に呼ばれてたんだ……』
遥が告げた誠の物騒すぎるあだ名に画面を覗き込んでいる宗次以外の全男子が驚愕した。
「海野君は僕らと同じ中学校だったの？」
「中学は違うけど近くではあったんだ。だから、須藤さんの名前と噂

は聴こえてきて……」
「……どんな噂なんや？」
一樹の疑問にそう返した遥に映助は顔を引くつかせながら尋ねる。
「えっと……思い出せる範囲では喧嘩では常に敵の返り血に染まる位に殴ったとか、須藤さんの姉貴分の女子高生を部活内での下らない嫉妬で自分の彼氏に犯させようとした人間を彼氏もろとも須藤さんの拳と顔が返り血で濡れ、相手の顔が整形でもしないと戻らないって言われた位に変形するまで殴ったとかヤリサー化してた姉貴分の高校のサッカー部の部員全員を一人で病院送りにしただとか色々あるけど……覗きで関連性があるのは修学旅行の時かな？」
遥が話した誠の武勇伝に既に覗きをしたいという気持ちが盛り下がりつつある男子達に遥は駄目押しの話をする。
「なんでも中学の修学旅行で他校の人まで巻き込んだ覗き騒動があったみたいだけど……須藤さんはそれを一人で制圧した上に、主犯の生徒達を殴り殺して地面に埋めたんだそうです」
「誇張が酷い!?　そこまではしてないよ！」
『『そこまでは』って事は……』
『それなり以上の行動はしたのね……』
『まあな』
遥の言葉に一樹は幼馴染みが誤解されるのを防ぐために慌てて噂を訂正する。
「最初の喧嘩での噂は返り血は相手がナイフとかの凶器を出して抵抗した時位だし、お姉ちゃんの騒動は顔の骨は折ったけど整形までは行ってないよ。……彼氏さんの股間は潰したみたいだけど、それは誠ちゃんも犯そうとした正当防衛だったし、サッカー部の事件は誠ちゃんとお姉ちゃん経由で弱い部を脅迫してたサッカー部を告発されて部を潰された事に対する一部の先輩達が逆恨みで夜道で襲いかかったからだし……病院送りにしたのは本当だけど……」
『色々やったのね……』
『でも、大半は相手の方が悪いよね』
『女の敵ばっかりですね～』

『お姉ちゃんって事は、斑鳩君のお姉さんなの？』
『ちげえよ。俺や一樹の家の近所の年上の幼馴染みだよ』
誠への一樹の擁護を男子達はその話し方で巻き込まれたんだろうなと思いながら聴く。
「最後の覗きの騒動に関しては確かに一人で制圧したけど……その後は覗きをした男子達の学校の先生達を呼びに行ったから殺してないよ。それに、殺してたら特高にこれないよ？」
「それもそうだよね……」
「下手をしたら少年院行きよね……」
「おーし、ついたな」
その言葉で殺される事はないと解った事で男子達はホッとしたが……凄まじい強さを誇る誠に対して完全に腰が引けたらしく、大半が覗きに消極的になっていた。
「なんやなんや！　たった一人の武勇伝にわてらのミッションが阻める……「既にバレてるし、後ろにいるぞ」ギャー!?」
「い、何時の間に!?　と、言うよりも会話をなんで知ってるんだ!?」
映助はそんな仲間達を激励しようとして……後ろにいた誠に後頭部をアイアンクローで握られて悲鳴をあげ、英人は誠が映助主催の覗きの相談を何故か知っている事について驚いた。
「ああ、そりゃ空知が小向井に頼まれてスマホで会話を流してたからな」
「これで良かったのか？」
「海野も覗きの阻止に乗ってくれてありがとうね」
「いや、それ程でも。僕も覗きに賛成しようとしたし……」
「それでもお礼は言わせて！」
誠が宗次に話を振ると、宗次が男子達に向けたスマホに映っていたのは「通話中」の文字と、離れた声も拾える「ハンズフリーモード」のアイコン。
そして、通話相手の名前「小向井心々杏」の文字。
遥も誠の武勇伝を聴かせた事によって男子達の士気を盛り下げた事を女子達に感謝される。

「き、兄弟！　裏切ったんか!?」
「いや、覗きは普通に犯罪だと思うが？」
「「全くもってその通りだ！」」
　映助の言葉に宗次は常識的に返し、優太と英人はその言葉に頷きながら同意した。
「さ、遠藤君以外の男子はお風呂に行くと良いですよ～？」
「今からこいつの処刑が始まるからな」
「ま、待った！　覗きいうても未遂なのに、体罰とかやりすぎや！」
　必死に命乞い（？）をする映助に、陽向と誠は意外にも頷いて見せた。
「そうね、ＣＥと戦うエース隊員が、体に怪我を負うのはまずいわよね」
「おぉ、分かってくれたんか！」
「だから、心に傷を負ってもらうぜ」
「……えっ？」
　訳が分からず困惑する映助の前に、零が歩み出てくる。
　その手には一台のタブレットＰＣが握られており、見覚えのある白衣姿の女性と眼鏡の女性が映っていた。
「京子先生に了子先生っ!?」
『うん、女子の皆に頼まれて、悪い男子の遠藤君に罰を与える事になりました』
『青春をしろとは言ったけど、犯罪は絶対に駄目よ？』
　校舎の地下研究所らしき場所と教師用の部屋から、保健医こと京子と副担任の了子が実に楽しそうな笑顔で通信を送ってくる。
『その罰だけど……実は皆を本校に招く前に、身辺調査をしていたのよ』
「えっ？」
『持病が無いかとか、親族が怪しい宗教に入ってないかとか、調べておかないと後で問題になるのよね』
　日本の国家機密に関わる隊員を育成するのだから、その程度の調査と選別はして当然であろう。

『その中で、皆の性格を分析するために、図書館で借りた本とか、通販サイトで買った本とかも調査したの』
「まさか……」
『というわけで、遠藤君が買ったり借りたりした恥ずかしい本のタイトル暴露大会、始めるわよっ！』
「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」
『あ、あなた達は早く行った方が良いわよ？　でないと読み上げるから』
「「失礼しましたーーーー！」」
　映助の悲鳴が響き渡る中、他の男子生徒達は了子の言葉に慌てて風呂場へ向かって走り出す。
「やはり、男だよな」
「あんまり見ないでください……」
「空知、ちょっと失礼だぞ？」
「乗らなくて良かった……」
「だよな」
「だけど、ちょっと同情しちゃうよな」
「そうだな……」
　男子達は映助が受けているであろう拷問にほんの少しだけ同情しながらのんびりと湯船に浸かっていた。
　こうして、一年Ｄ組の夜は更けていくのであった。
　……風呂から上がった後で見に行くと映助は真っ白な灰になって椅子に座っていた。

【英傑達の英雄譚・第二章『最初の授業』　４３ページより】

「……」
「自業自得とはいえ……まだ灰のままか」
　英人は日課にしていた朝のランニングを終えた後で談話室を見ると、そこには昨日の覗き未遂の罰で灰となったままの映助がいたので彼は映助の冥福を祈る様に手を合わせると、流した汗をシャワーで処理するために浴場の着替え場へとやって来た。
　そこには、誰かの下着が置かれた籠があった。
「……空知も朝練をしたのか？」
　英人は武人肌で超えたいと思った同じ寮に住む人間が朝練をしたのだと思って浴場への扉を開け……
　そこには、一糸纏わぬ産まれたままの姿の響がシャワーを浴びていた。
「……ふえ？」
「……え？」
　二人は裸のままお互いを見つめ合い……響は顔を急速に赤くし、英人は事態を把握して慌て始め……
「キャアぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」
「ま、待ってくれ！　これには……」
「音宮、背中を借りるぞ！　遠藤（変態）はそこを動くな！」
「ぐえぇ!?」
「って、天道寺？」
　響の悲鳴が上がると、英人は慌てて弁明を始め……次の瞬間、英人は響の後ろから響の悲鳴を聞き付けてやって来た同じく裸の誠に蹴り飛ばされる。
「なんでお前が……」
「に、日課のランニングを終えて汗を流そうとしたら、音宮さんがいて……」

ひっくり返った英人に誠が何故此処にいるのかを問い掛けると、英人はふらつきながらも立ち上がりながらそう言った。
「あー……まあ、俺ら以外にも朝練をやる奴はいるか。悪い、大丈夫か？　後、早く出た方が良い」
「わ、解った……」
勘違いで蹴りをいれたことに対する気恥ずかしさからかそっぽを向きながらの誠の言葉に英人は蹴られた顎を擦りながら浴場を出ると……
「天道寺、あんた……」
「最低ですね～」
「天道寺、お前……」
「誤解だ！」
響の悲鳴を聞き付けて浴場の外にいた陽向と心々杏には見下げ果てた存在を見るような目で見られ、宗次からは呆れたような顔で見つめられた英人は慌てて弁明をする羽目になった。
……その話の流れで宗次が夜に練習をしているのを知った英人も夜練を始め、そんな英人に「俺も負けてられないな」と朝練を始めると響が他のクラスメイトに音頭をとってクラス総出で朝練や夜練をする事になるのだが……それは、まだ別の話である。

ーーーーーーーーー

「……」（ぷしゅ～）
「すげー……本当に頭から煙が出てるぜ？」
「これも幻子の効果のなのかしら？」
そのページを読み終えた響は当時を思い出して恥ずかしいのか顔を真っ赤にして手で顔を覆っていると、その頭部から幻想（フィクション）に影響されたのか白い煙が出ているのを見て誠と陽菜は苦笑いをしながら本を読んでいた。
「てか、これじゃあワテが見境なしの変態みたいやないか！　書き直しを要求「「事実だろうが！」」あぎゃあ!?」
自身に関して事実を書かれているにも関わらず抗議をしようとしていた映助の頭部が誠と荒い言葉遣いをする心々杏が放った回し蹴

りでサンドイッチにされて崩れ落ちる。
「あ、あはは……」
「変わらないな、あんな所も……」
誠と心々杏に蹴倒された映助を呆れた目で見る一樹と優太の隣の席にはなにかを読んでいる英人とそれを訝しげに見ている宗次と少女がいた。
「英人、何を読んでいるんだ？」
「ん？　ああ、大馬先生や京子先生が政府の書庫から見つけてくれた本の原稿なんだ。タイトルは『聖剣の英雄伝説』っていうんだが……完全にやらせ小説だな。多分だけど、『機械仕掛けの英雄』計画で俺が英雄になった時の偶像（げんそう）を維持する為の小説だと思う」
「でしょうね。でなければプロットの段階であなた達が異世界に転移……と言う名の地球からの追放を画策するわけがないもの」
少女の言葉に英人と宗次は同時に目をむいて驚く。
「英人はそんな事になりそうだったのか!?」
「偶像を維持する為だろうけど、やりすぎだろ！　今考えてみても、音宮さんと彼処で出会えたのは本当に運が良かったんだな……」
「でしょうね」
少女は英人の言葉にそう呟きながら手に持つ本を次のページに進める。
次なる章は……英人や響、宗次達、果ては『機械仕掛けの英雄』を支援している人々も考えてもいなかった初陣の際の出来事であり……響の幻想兵器の歌が響き渡るその最初の章でもあった。

第三章～突然の遭遇、歌が響く時～

第１４話　現状の戦線

それは特高での生活にも少しだけ慣れてきた、入学から三日後の金曜日に起きた。

教室で数学の授業を行っている時、突如『ウゥーッ！』と不気味なサイレンが鳴り響いたのだ。

「なにこれ!?」

「何やっ!?」

「静かに、お前達は座っていろ」

浮足立つＤ組の生徒達を、大馬は冷静な声で諌める。

しかし、サイレンに続いて教室の外から何十人もが一斉に廊下を走る、ドドドッと雪崩のような音が響いてきては、落ち着くなど無理であった。

「先生、何やねんこれっ!?」

「だから静かに座っていろ、ＣＥが侵攻してきただけだ」

「えっ、嘘!?」

その言葉に、映助や響だけでなくほとんどの生徒が顔を青ざめた。

「一大事やんかっ!?　こうしちゃおられん、今こそワテらが戦う時――」

「そ、そうだよね!?　ええっと、変換機は……」

「いいから黙れ（ゴキッ）」

「こぺるっ！」

「音宮さんも落ち着く（ポスン）」

「はにゃ!?」

急いで教室から飛び出そうとする映助の首に、大馬はまたスリーパーホールドを極め、同じく飛び出そうとした響に良子が苦笑いをしながらその頭を出席簿で軽く叩く。

大馬のスリーパーホールドは早とちりしたとはいえ、敵と戦おうとした勇気に免じて、普段の映助に対する制裁より二割ほど弱めであっ

た。
「いいか、今のがＣＥの襲撃を知らせるサイレンで、走る音は二年と三年が出撃したものだ。まだ集団戦闘の訓練を終えていないお前達一年は、行ってもお荷物になるから留守番だ」
「出撃しようって勇気は称賛するけど、これは現実（リアル）で幻想（アニメ）じゃないわ。『初出撃で大戦果！』なんて、夢幻（フィクション）よ？」
　大馬と良子は反論を許さぬと強く言い切り、鋭い目で生徒達を見回す。
　Ｄ組の六割は戦わずに済む事に安堵し、残り三割は戦えない事が不満で口を尖らせている。
　残り一割は冷静に話を聞いており、それを見て大馬と良子は嬉しそうに笑った。
「襲撃と言っても、ここ前橋市の近くまで攻めてきたわけではない。防衛ラインである軽井沢の周辺まで来ただけだ」
「みんなの初出撃も軽井沢での戦闘になるだろうから、周辺の地形は頭に叩き込んでおいてね？」
　そう言って大馬は教科書を閉じ、ノートパソコンとプロジェクターの準備を始めた。
「丁度良いから、今日はＣＥの襲撃からその対処までの流れを見学するとしよう」
「みんなは観やすい位置まで席を移動しても良いわよ！」
　プロジェクターの光が黒板を照らし、走る人の群れを映す、妙にグラグラと揺れる映像が流れた。
「エース隊員は出撃のさい、カメラと通信機が内蔵されたヘッドセットを着用する。これは出撃準備をしている、とある三年の撮った映像だ」
　大型のヘッドフォンに似た装備を被り、腕には幻想変換器を身に着けた上級生達が、慣れた動きで校舎横の格納庫に走り込み、その中で発進準備を始めていた装甲車に飛び乗っていく。
「あの、制服で出撃するんですか？」
「そう言えば、そうだね」

今、自分達が着ているのと同じ、学生服で装甲車に乗る上級生達に気づいて、陽向が手を挙げて質問し響はそれに同意した。
「そうだ、別にジャージでも迷彩戦闘服でも変わらんがな。どうせ幻子装甲が無ければ、何を着ていようとＣＥの攻撃は防げん」
「逆に言えば、幻子装甲さえあれば裸でも良いんだけど……後世まで恥を曝したくないなら止めきなさい」
「先生、それ誰もやらないような……？」
「現三年の一人が風呂に入ってる最中の襲撃で慌てすぎて裸のまま出撃しようとする事件があってな……」
大馬が遠い目をしながら言ったその言葉にＤ組全員が「あったんかい！」と心の中でツッコンだ。
「でも、制服だと動きづらくないですか？」
「そのために、装甲車の中に着替えが人数分積んである。移動しながら着替えればいい」
「凄い効率的……」
響が言ったように全員が着替えるのを待ってから出撃するより、その方が早いから当然の処置であろう。しかし――
「男子の目の前で着替えるんですか？」
「――っ!?（ガタッ）」
「落ち着け」
「全然懲りてない……」
無言で立ち上がった映助の肩を、後ろの宗次が叩いて止める。
「ズボンを履いて上着を替えるだけだろ、別に下着姿を見られるわけでもあるまい」
「あぁ、そうですよね」
「……ちっ」
密かに舌打ちした男子は、映助だけではなかった。
「……遠藤君も他の男子達もお仕置きを受けたいのかしら？」
良子がそう言ってタブレットＰＣを取り出すと、先日の覗き未遂事件で映助が受けたえげつない制裁を思い出して男子全員が押し黙った。

「これは後々決める事だが、クラスを十二人前後の三チームに分けて、それを『分隊』という最小単位とし、一塊となって作戦に当たってもらう」
「軍隊の部隊単位で言うと、分隊が三つの一クラス約四十人で『小隊』、小隊が三つの一学年で『中隊』、中隊が三つの学年全てで『大隊』となるわ。まあ、特高に一年から三年が全て揃ったのは今年が初めてで、ようやくエース大隊が完成するんだけどね」
　大馬の説明に良子は苦笑いをしながらそう補足した。
「装甲車に乗り込んでいるのは全員同じ分隊の奴らだ。他にも、今後予定されている集団訓練は分隊単位で行う。今から息の合いそうなメンバーを見繕っておけよ、さもないと……」
　待っているのは地獄だ――と、声には出さず、口の形だけで忠告するのであった。
「兄弟、ワテらズッ友やろ!?」
「ずっとも?」
　涙目で宗次にすがる映助だが、田舎者は十数年前の若者語など知らなかった。
「須藤さん!」
「りょーかい。他の連中にも声をかけないとな……」
「ひ、陽向ちゃん、私……」
「はいはい、大丈夫、一緒のチームになろうね」
　響が即座に誠に声をかけたり、ボッチは嫌だと泣きつく神奈を、陽向が慰めたりと、クラスの中はちょっとした騒ぎとなるが、担任が手を叩いてそれを鎮める。
「静かに、分隊の決定はまだ一ヶ月は先の話だ。今は映像に集中して、戦闘の流れを少しでも掴んでおけ」
　言われて生徒達は黒板に目を戻すが、今は軽井沢方面への移動中であり、退屈な装甲車の内部が映し出されるだけであった。
「これみんな三年か、思ったより緩い顔しとんな」
「でも、緊張してるよりは良いかも。安心して見れるし……」
　両側に六人ずつ向かい合って座る、三年生達は楽しげに談笑してお

り、これから戦場へ向かうという気負いは窺えない。
　しかし、その明るさも兵士に必要な資質であった。
「音宮の言う通りだ。毎日気を張っていたら、緊張で押しつぶされて自滅するだけだぞ。抜ける時に抜いておく切り替えも、これからは必要になると思え」
「気を抜きすぎても大変な事態になるから、そこは匙加減を間違えないようにね？」
「抜ける時に抜く……やらしいな」
「お前はずっと気を抜くな」
　大馬の投げたチョークが、必中の槌ミョルニルのごとき精度で映助の額を打ち抜いた。
「さて、そろそろ到着だな」
　無駄話をしている間に、装甲車がゆっくりと停止して、上級生達が素早く降車を始めた。
　カメラが捉えたのは、避暑地として有名だった軽井沢より少し進んだ先、長野県御代田町の光景。
　有るのは古寺とゴルフ場、そして畑くらいという、さびれた田舎ではあるが、静かで穏やかな空気に包まれた町。
　しかし、それも六年前の話でしかない。
　今の御代田町にあるのは、ただ一面の焼け野原。
　ＣＥとの度重なる戦闘によって刻まれた、鉛玉と炎の破壊跡だけであった。
「酷い……」
「……」
　テレビでも何度か流され、ネットを探せばいくらでも見つかる光景。
　それでも、三年生の視点で見る御代田町の生々しい光景は、生徒達に恐れと怒りを生み出すのに十分であった。
「慣れろとは言わん、だが今は上級生達の動きに注目しろ」
「ええ。怒るのは良いけど、怒りすぎは判断のミスを招くわ。今は上級生の闘いを見て学びなさい」

憤る生徒達に優しい声をかけつつ、大馬と良子はプロジェクターに別の映像を出す。
それは衛星が捉えた御代田町の写真で、西の方向、ピラーの存在する長野県松本市方面から近付いてくる、光り輝く群れが映っていた。
「……ＣＥ」
「そう。これが貴方達の戦うＣＥよ（悲しいな。あの時、人と解り合おうとしていた者達の使者を討つことになるのは……）」
人類の敵、謎の結晶体、クリスタル・エネミー。
それが視界に入った瞬間、上級生達は一斉に動き出した。
『射撃隊、前へっ』
伝説の弓矢を、投石器を、投げ槍を持った者達が隊の前列に出る。
そして、確実に当たる距離まで引き付けてから、号令が上がった。
『放てっ！』
必殺必中の幻想を持つ矢や弾や槍が、まるで生き物のごとく宙を駆け、先頭を進んでいたＣＥの中心部、赤く光る球体を貫いた。
「あの赤い球体が奴らの弱点『コア』だ。あれを破壊しない限りＣＥは止まらん」
大馬が解説している間にも、次々と伝説の射撃武器が結晶体を貫いていく。
しかし、押し寄せるＣＥの数はあまりにも多く、半数ほど減らした所で、矢の方が先に尽きてしまった。
「射撃系の幻想兵器は、使った分だけ幻子干渉能力を消費して、ついには幻子装甲すら維持できなくなる。射撃武器の使い手はよく注意するように」
「はい」
（そういや、鋼金暗器には弓の形態があるが……その場合は射撃系と同じになんのか？）
宗次の横に座る、投石器使いの一樹が真剣な顔で頷いた。
『盾隊、前へっ！』
号令に合わせて射撃部隊が後ろに下がり、盾を構えた者達が前に出てくる。

「盾の幻想兵器は幻子装甲よりも遥かに硬く、ＣＥの攻撃を何十回も防げる。常に最前線に立って味方を守り切る、最も危険で重要なポジションだ。心しておくように」
「あ、うぅ……」
「うへぇ……」
　盾の使い手だが臆病な神奈は、怯えて陽向に抱きつき、同じく盾使いの昴は責任の重さに溜め息を吐いてしまう。
　そんな中、カメラに映る上級生達は、ＣＥが迫ってくるのを無言で待っていた。
「前にも話したが、ＣＥの攻撃は射程が約三十ｍと短い。一部の例外を除いてこちらから飛び出して体力を消耗するより、待ち構えた方が楽だ」
　そう頭で分かっても、ゆっくりと敵が近づいてくるのを、目の前で待つ緊張感はどれほどのものだろうか。
　耐えかねて突撃しかねない味方を『吹き飛ばせ、天叢雲（あめのむらくも）ぉ！』
「え、この声って……？」
　響に聞き覚えのある咆哮と共に突撃した青年が風で出来た巨大な斬撃を放ってＣＥの前衛を壊滅させるとそのままＣＥの戦列の中に突撃し、一人でＣＥと戦闘を開始する。
『大和!?　ああ、もう何時もこれなんだから……』
『だが、奴のお陰でＣＥの隊列が崩れたのも事実だ！　総員、突っ込め！』
「うん？　この声は……」
　宗次が疑問を抱き、考え込もうとしたその時、ついに接近戦の幕が上がった。
『『『うおおおぉぉぉ――――っ！』』』
　雄叫びを上げ、上級生達は一斉に駆け出した。
　先頭を走る盾役達が、三十ｍの距離を切った瞬間、青年の対処をしていないＣＥが一斉に赤い光線を放つ。
　しかし、ＣＥの中に突撃した青年によって隊列が乱されてるのもあってか所々歯抜けになっており、狙いが正確なのもあって当たるも

のは伝説の盾によって容易く防がれ、中には光線の合間を縫うように駆ける人間もいた。
そして、次の攻撃が始まる僅かな合間に、エース隊員の花形、近接部隊がＣＥに躍りかかった。
伝説の剣が、斧が、槍が、槌が、火を噴き雷を轟かせ、結晶体を両断し、粉砕し、貫いていく。
人が火薬と銃を手にした事で忘れた、原初の荒々しくも美しい闘争の風景がそこにはあった。
「凄い……」
「ＣＥの攻撃は脅威だが、約五秒に一度ほどの頻度でしか発射できないようだ。この間隔を体に刻み込まなければ生き残れないぞ」
「それと、ＣＥは同士討ちを避ける傾向にあるから、いざという時は光線を射ったＣＥを盾にするのも手よ」
良子の言う通り、同士打ちを避ける知能はあるのか、後続のＣＥは前方に味方がいる場合は、攻撃を控えているようだ。
おかげで、突撃した青年や近接部隊は大した反撃を受ける事なく、目の前の敵を一体ずつ確実に仕留めていく。
とはいえ、光の速度で放たれる攻撃を全て避けられるはずもない。
最前線で戦っていた斧使いが、運悪く集中砲火を受け、変換器がけたたましいアラームを響かせた。
『藤村、飛ばすぞ！』
『すまん！』
『大和が藤村を避難させる！　河野、替わりに前へ！』
『分かった！』
『藤村を狙う奴は叩き潰せ！』
突撃した青年が風を操って斧使いを避難させると的確な指示で次の生徒が戦線を支え、斧使いを狙ったＣＥを他の生徒が討ち取っていく。
その声を聞いて、宗次と響の疑問はようやく氷解した。
「麗華先輩だ」
「やっぱり、風宮先輩だ」

「はぁ？」
「号令を出していた、このカメラの人物、麗華先輩だ。後、真奈先輩も一緒に戦ってる」
「つで、突撃したのは私が話した風宮先輩だよ」
「なんやてぇぇぇ――――っ!?」
　衝撃の真実に、映助は思わず絶叫した。
　食堂で会った時とは少し違う、高めの大声だったので気付くのが遅れてしまったが、その声は確かにあのイケメン女子、先山麗華と侍女子の御劔真奈、問題児の風宮大和のものだった。
「なんだ、知っていたのか？　確かにこの映像は先山のものだ」
「いや、それも驚きやけど、なんであのイケメンが指揮してんねんっ!?」
　映助がそう問い詰めると、大馬はむしろ不思議そうな顔をした。
「何故って、先山は三年Ａ組の分隊長で、実質的な指揮官だからな。知らなかったのか？」
「知らんわそんなのーっ！」
　映助の絶叫は、響を除いたＤ組全員の総意であった。
「Ａ組って、あのイケメンはワテらと同じ飯食ってたやんっ!?」
「確かにＡ組は特別な食事を支給されているが、諸君らと同じ物を食べるなとも言われていないぞ」
「しかも三年の分隊長で指揮官って、それこの学校で一番偉い奴やんかっ！」
「いや、大隊長であり生徒会長でもあるトップは別にいるぞ。ただ、生徒会長は幻想兵器の性質上、皆を巻き込まないよう一人で突撃するから、全体の指揮は先山が担当しているだけだ」
　どちらにせよ、校内ヒエラルキーの最上層に位置するのは間違いない。
「風宮先輩が突撃するのは……？」
「う～ん、待ちきれないみたいなのよねぇ……」
　生徒会長とは違って大和が突撃する理由を良子は歯切れ悪く話す。
「あの人が、Ａ組で指揮官……？」

「強力なライバル登場ですね～？」
（何が？）
（やれやれ……）
心々杏がからかっても、陽向は青ざめて聞こえていない様子であった。
「凄い人だったんですね」
「そうだな」
「戦いてぇ……！」
宗次の方は驚いた様子もなく、一樹と頷き合って映像を眺める。
麗華のカメラが映す光景から、ＣＥは見る間に減っていき、ついには最後の一体が打ち取られ、人類の敵は全て粉々の欠片となって地面に散らばった。
『状況終了、第二陣がなければこのまま帰投します』
『了解、ご苦労様でした』
京子らしき声が労い、上級生達は警戒しつつも帰る準備を始めた。
「以上で作戦は終了だ。ここ数年、ＣＥは今回のような小部隊を繰り出してくるのみで、こちらから仕掛けない限り、六年前ほどの大部隊を展開してくる事はない。そのため、現在のような睨み合いが続いているというわけだ」
大馬の説明も、イケメン女子・麗華の正体が衝撃的すぎて、交流のなかった響以外のＤ組生徒達の大半には聞こえていなかった。
「何をそんなに驚いているんだか」
呆れ顔をしながら、大馬はパソコンを操作して新しい映像を映し出す。
それは上空からの衛星写真で、群馬から南西に二百km以上離れた名古屋周辺を撮ったものだった。
「今回、ＣＥは東日本方面にしか進行してこなかったようだが、当然ながら西日本方面へと進行する事もある。これは一ヶ月ほど前、それを撃退した自衛隊の映像だ」
名古屋より三十kmほど東へ進んだ先の岐阜県中津川市。
御代田町と同様に人の姿が消え、建物すら焼け落ちて荒野と化した

そこに、ＣＥが群れをなしてゆっくりと進んでくる。
　だが突然、無数の轟音と土煙が上がり、砕けたＣＥの結晶が宙を舞った。
「すっげぇ……」
「ＦＨ７０・１５５㎜りゅう弾砲、および９９式自走１５５㎜りゅう弾砲による間接射撃だ」
　誠の驚きや大馬の説明の間も砲撃は延々と続き、ＣＥを粉々に粉砕していく。
「ひぇ～、これならワテら用なしやん」
「だねぇ……」
「そうなら良かったんだがな……」
「そうね……」
　感心する映助達が見守るなか、砲撃は止んで風が土煙を吹き飛ばしていく。
　現れたのは、ガラス片のごとく大地に散らばった結晶と、その中でまだ光を放つ赤い球体。
「死んでない？」
「そうだ、ＣＥはコアを破壊しない限り活動を止めない。そして、バリアのような物でコアを厳重に保護しているらしく、並みの砲撃では表面しか破壊できない事が多い」
　とはいえ、割れて光を失ったコアも散見されており、決して砲撃が無駄だったわけではない。
「あとは戦車で接近し、外さないよう至近距離からコアを破壊して回るのだが、この時が一番気を使う」
　大馬はパソコンを操作し、地面に半分以上埋まったＣＥコアの動画を映す。
「これは敵を研究分析するため、あえて破壊せず放置しておいたコアの映像だが、見ていろ」
　百倍速で流れる動画の中で、球体のコアしか残っていなかったＣＥの周りに、キラキラと光を反射する結晶が生まれていった。
「再生してるっ!?」

「そう、ＣＥはコアを破壊しない限りは時間はかかるけど再生するわ」
　そして、何度でも人々を襲ってくる。
「だから、コアは何としても破壊しなければならない。土砂に紛れていた物を見逃したり、間違って戦車で踏んで地面に埋めたりすれば一大事だ」
「実際、大戦初期ではそれが起きた結果、大勢の犠牲者がでたわ」
　戦車で砲撃跡に向かった自衛官達は、慎重の末に慎重を重ねて地面を精査していた。
「もっとよく調べようと戦車から降り、埋まっていたコアに攻撃を受けて、再起不能になった者もいる。辛く危険な任務だ」
「……」
「それに榴弾は一発で二十万円以上もするし、それを一度の作戦で二百発以上も撃ち込んでいるわ。掃討を行う戦車の弾薬、燃料、それにメンテナンスの費用も考えると……嫌になってくるわね」
「何億万円かかっとるんや……」
「想像するだけで目眩してきた……」
　ＣＥの進行は年に何十回も繰り返されるのだ。
　いったいどれほどの資金と資源が失われているのか、財務大臣でなくとも頭を抱えたくなる話であった。
「そら消費税も十二％に上がるわな」
「近々、十五％になるそうだぞ」
「うえっ!?」
「まだ上がるのかよ……」
「仕方がないんだ、輸入している武器弾薬の原料費が右肩上がりだからな」
　映助や響、愚痴る誠をたしなめつつ、大馬も勘弁してくれと溜息を吐く。
　他国もＣＥとの長い戦争を続けており、慢性的な物資不足に悩まされている。
　自国の分すら不足している物を、売ってくれと頼まれて、はい喜んでと安値で差し出す馬鹿はいない。

ＣＥ登場以前の何倍という値段を吹っ掛けられても、それを黙って買うしかないのが日本の現状であった。
「戦うには金が要る、ＣＥに滅ぼされたくなければその金を払い続けるしかない。そして言い方は悪いが、諸君らエースは非常に安上りなんだ」
（……同時に、機械仕掛けの英雄（天道寺英人）を守る肉盾（モブ）としてもな）
（まあ、こいつや一部の人間は罪悪感を抱いてはいるらしいが……）
全国から適任者を選び出す作業や、幻想変換器の作成費、校舎やその他設備の費用諸々を含めても、自衛隊に掛かっている金額の十分の一もない。
何より、戦車や自走砲と違って弾薬のような消耗品が要らず、物資不足に悩まされない。
「ＣＥの進行が始まって六年、元から資源不足で悩まされてきた日本は、むしろ良くもった方だろう」
「現に自衛隊の装備の劣化は激しいし、弾薬も少ないから今は騙し騙しの状態ね」
今の所は進行を全て防ぎ切り、都心部まで攻め込まれていないから、市民の多くが余裕を感じているが、それは混乱を避けるために流された偽りの希望でしかない。
一度どこかが崩れれば、東京、名古屋、大阪といった大都市にまでＣＥが流れ込み、日本という国は地図から消滅するだろう。
「我々は勝ち続けているのに敗北に向かっている。この流れを止められるのは諸君らエースしかいない、それを良く覚えていて欲しい」
普段厳しい大馬が、珍しく彼らを褒め称えた。
お世辞や激励の意図も含まれていたのだろうが、それでも嬉しくて、生徒達はむず痒そうに微笑する。
そこで丁度チャイムが鳴り響き、大馬はプロジェクターを片付けて教室を出て行った。
だから、宗次は聞く機会を逃してしまった。
（そこまで追いつめられて、どうしてピラーを破壊しない――いや、破壊できなかったんだ？）

無尽蔵のごとくＣＥを生み出してくる敵の拠点、巨大結晶柱ピラー。
それさえ破壊できれば、この不毛な防衛戦を終わらせる事ができる。
誰だってそう考え、実行に移すに決まっている。
しかし、今なお戦争が続いている以上、その作戦は失敗に終わったのだ。
その理由が何か、仮に聞いたとしても、大馬は答えてくれたかどうか、宗次には分からなかった。